

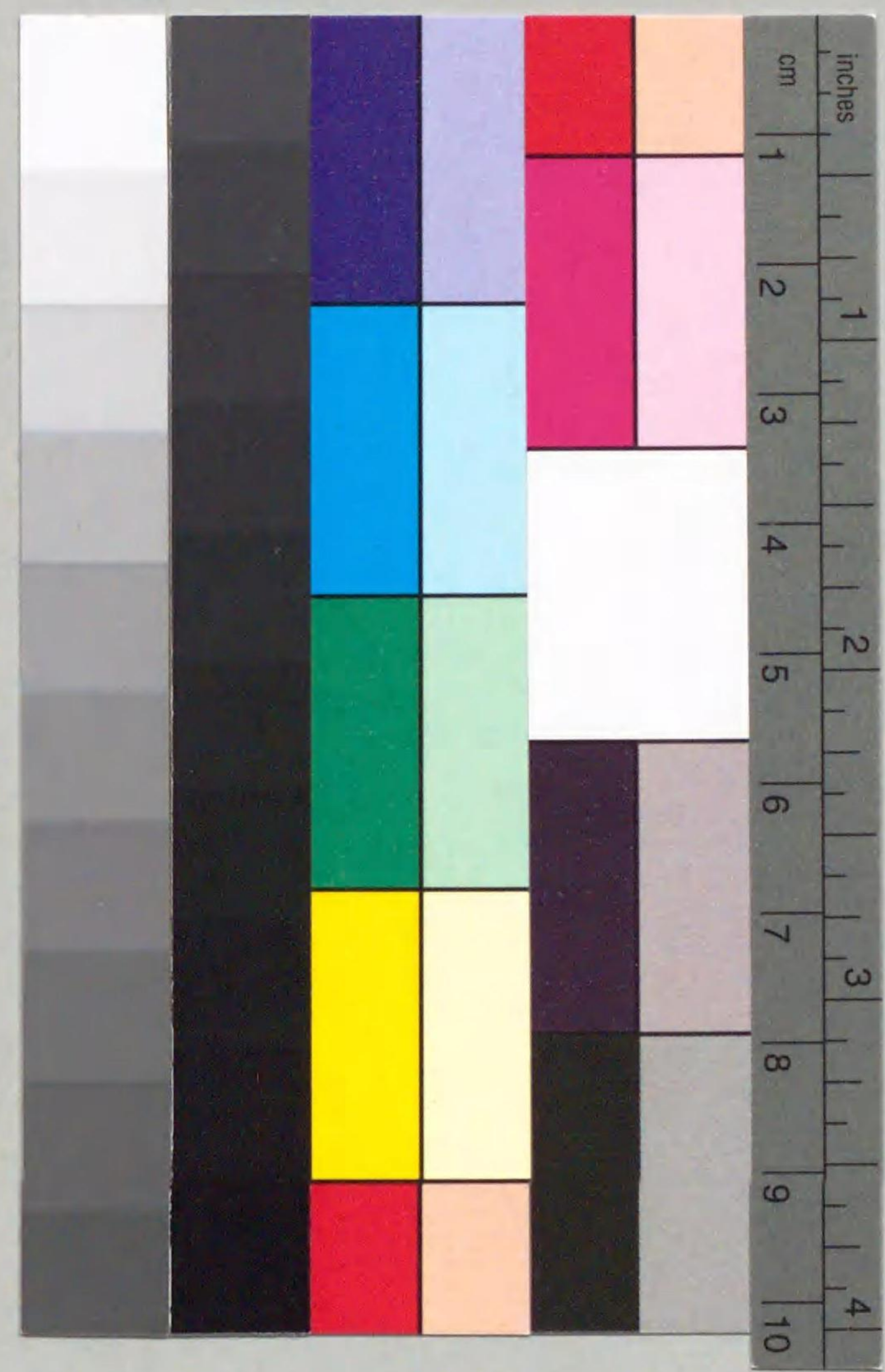
學級文庫

新編 武藏野

320
説5
12



ヨネネン社





八犬傳物語

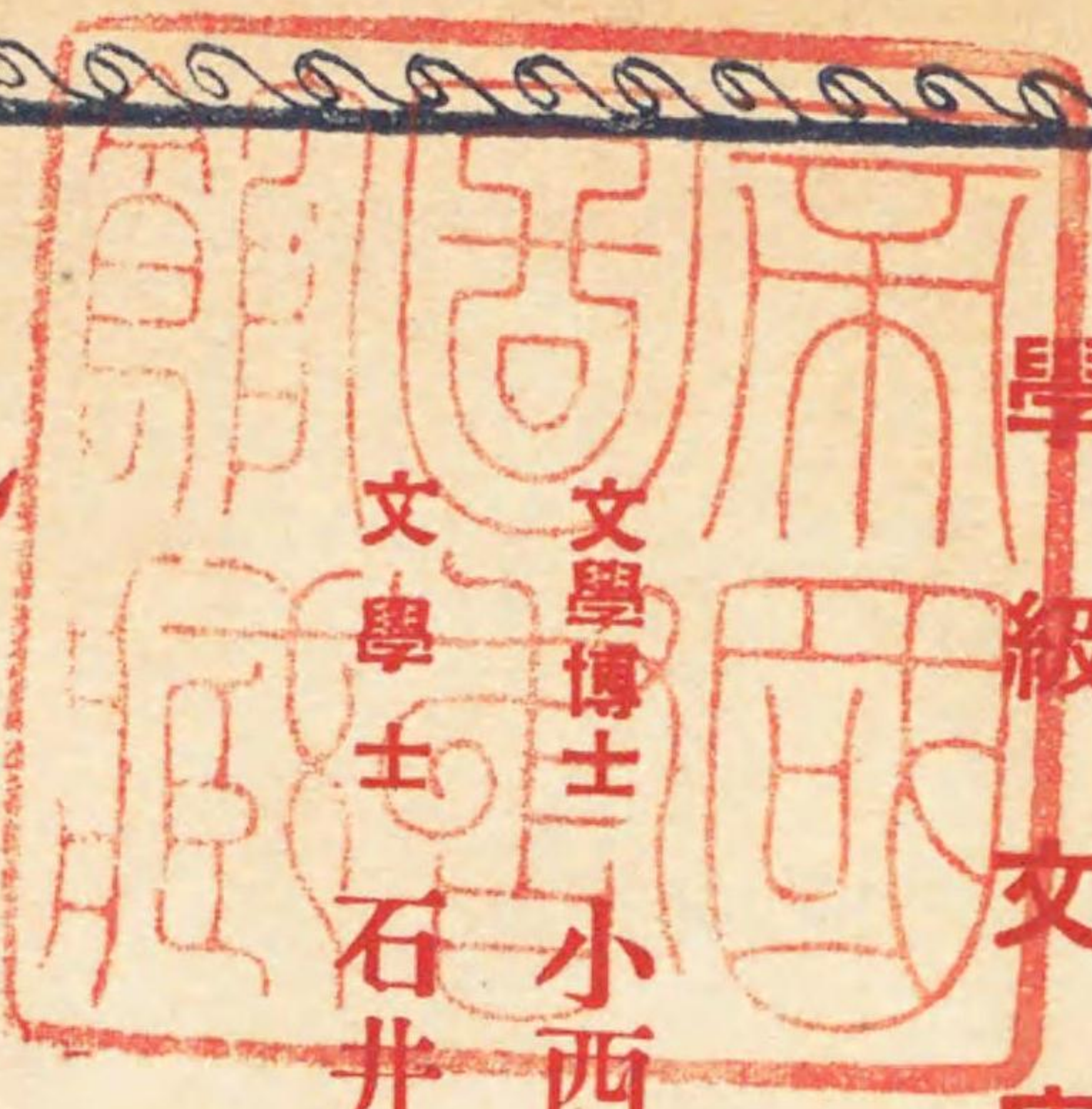
上下

學級文庫

課外讀本

文學博士 小西重直先生
文學士 石井蓉年先生

選



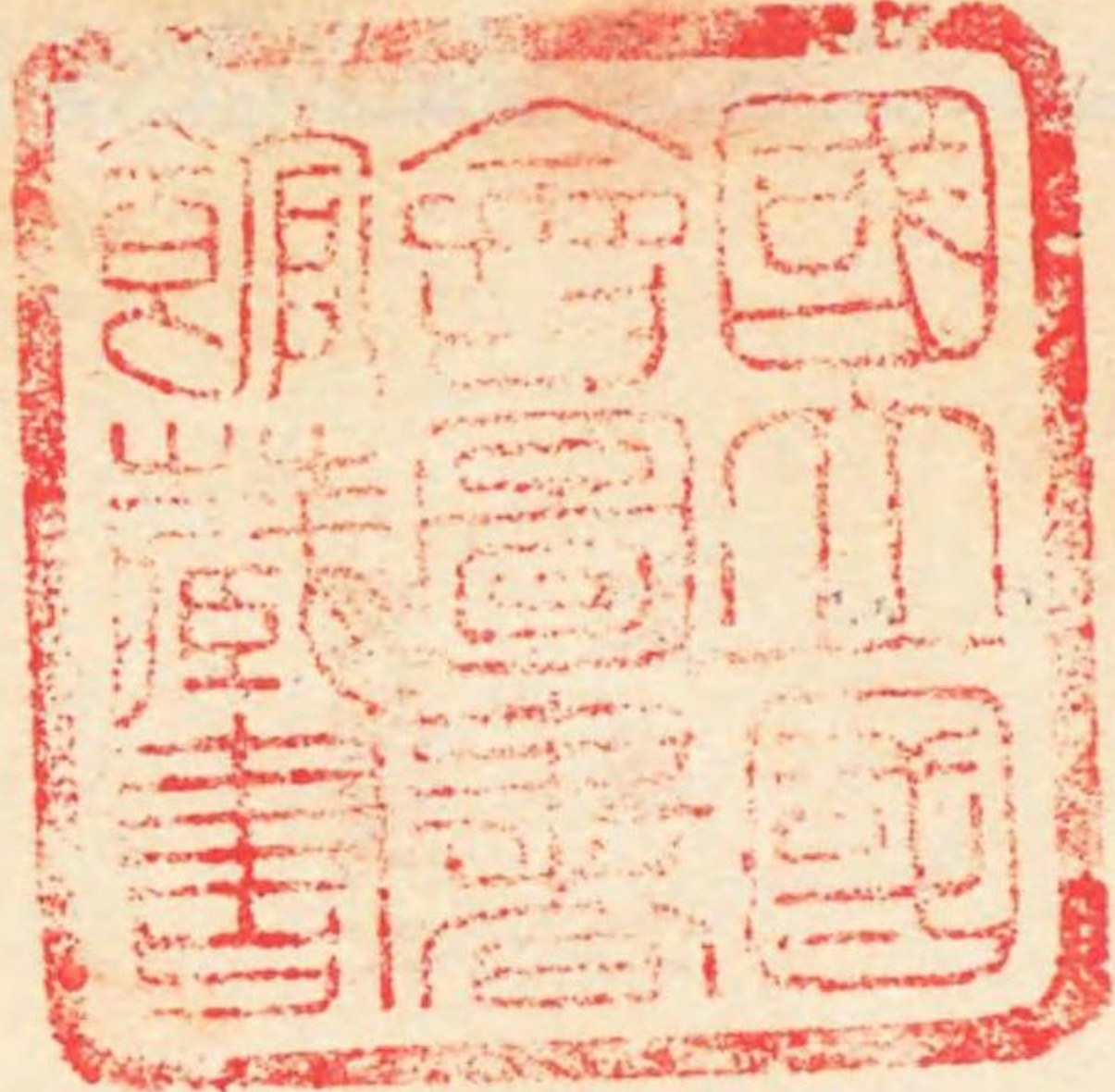


28

I-7

Vertical text on the left side of the right page.

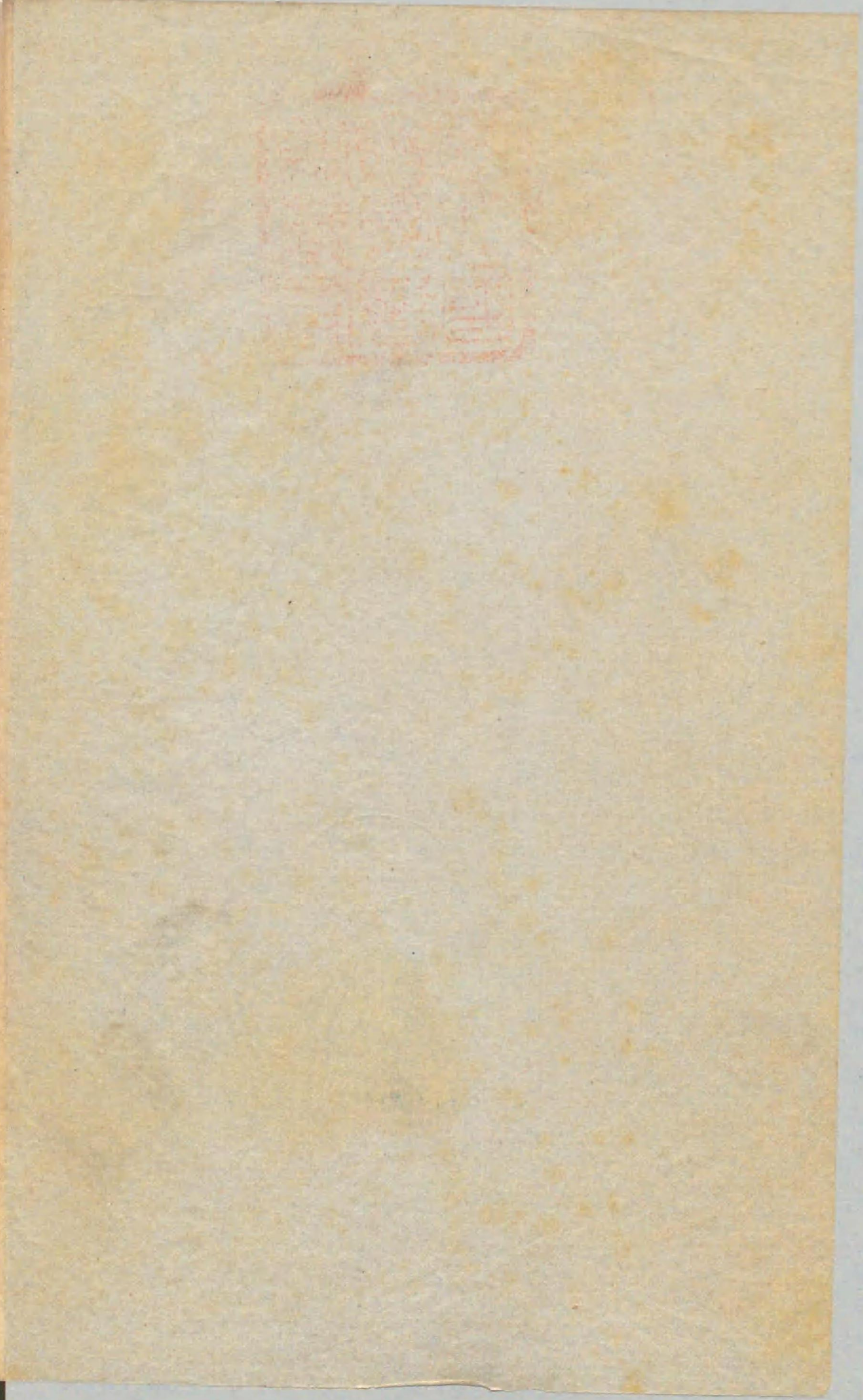
Vertical text on the left side of the right page.



Vertical text on the right side of the right page.

150878





自序

言ふまでもなく諸君は御承知でせうが、これからお話しようとする「南総
里見八犬傳」は、その昔、曲亭馬琴といふ偉い小説家が畢生の心血を注いで書
き上げた日本の大きな、そして素晴らしく面白い、立派な作品であります。
恐らく世界に十とはあるまいと思はれる程の大作なのです。かうした作品が日
本にあるといふことは、我々の誇りであります。そして日本人たる以上、一度
は必ずこの作品を味はつて見ればなりません。何故ならば、作者は日本國民とし
ての大事な幾つかの「徳」を讀者の心に植へつけようとしてゐるからです。一
口に言へば、それは「仁義禮智忠信孝悌」と言ふやうな難かしい言葉で言ひ現
はされますが、この物語をお読みになるに従つて、自づとそれはお解りになる
ことでせう。どうぞ、そのお積りでこの作品をとつくりと味つてお読み下さい。

昭和三年六月上浣

綠悠る城西の里にて

進藤泡影



八犬傳物語 目次

目次

上卷

- 一、安房へ落延びた里見義實……………一
- 一、父の訓戒……………二、安房の國へ……………三、悪者退治……………四、役の行者……………五、技平の犬
- 二、天晴れ八房の殊勳……………一五
- 一、卑怯な景通……………二、八房と義實……………三、敵將の首……………四、狂つた八房
- 三、山へこもつた伏姫……………三〇
- 一、富山の奥へ……………二、不意の發砲……………三、獵人姿の大輔……………四、飛び散つた球
- 四、犬塚信乃と犬川莊助……………四〇
- 一、番作と手束……………二、孝子信乃……………三、不思議な玉……………四、同じ痣、同じ玉……………五、
標助の頼み



- 五、火遁の名人犬山道節……………七
- 一、龜篠の悪計……………二、神宮川の瀕……………三、濱路さらはる……………四、救ひの手裡劍……………
- 五、玉の取替子……………六、墓六龜篠の最期
- 六、芳流閣上の戦ひ……………九〇
- 一、芳流閣の屋根へ……………二、眞逆縁に河へ……………三、文五兵衛と小文吾
- 七、下總古那屋の宿……………一〇六
- 一、嘩喧の仲裁……………二、殿様のお呼出し……………三、縛られた父……………四、房八の亂入……………
- 五、命の恩人……………六、念玉坊實は大輔……………七、暴風の梶九郎
- 八、妙義山の五犬士……………一三五
- 一、冤罪に苦しむ額藏……………二、刑場破り……………三、目覚しい兄弟の働き……………四、討ち
取つたのは偽首
- 九、上州荒茅山の麓……………一五五
- 一、戻つて来た猎平……………二、訪れた莊助……………三、久し振りの莊助と道節……………四、我子

目次



目次

の生首

三

十、小文吾の猪退治……………一七

- 一、落ち合つた五犬士……………二、犬士の大奮戦……………三、姉妹に乗せた馬……………四、馬加の邸へ……………五、馬加大記常武

十一、女装の勇士犬坂毛野……………一八七

- 一、毒殺された品七老人……………二、打明けた一大事……………三、美女女旦開野……………四、美少女實は毛野、五、千住川の舟

下 卷

十二、庚申山の山猫退治……………二〇五

- 一、鴟平の物語り……………二、深夜の怪物……………三、赤岩一角の亡霊……………四、現八角太郎を訪れる……………五、父親の難題……………六、鬮、體と形見の短刀

十三、鷺に攫はれた濱路姫……………二二二



十四、首を討たれた小文吾と莊助……………二四九

- 一、鬮牛見物……………二、小文吾暴牛を鎮める……………三、女按察の船蟲……………四、莊助船蟲を救ふ……………五、替玉で助つた二犬士……………六、乞食に化けた毛野

十五、千住川の邂逅……………二七四

- 一、思はぬ疑ひ……………二、捕つた盗人……………三、氷垣夏行の素性……………四、六年振りの再會

十六、犬坂毛野鈴ヶ森の仇討……………二八七

- 一、トひの物四郎……………二、逃げた猿……………三、毛野本懐を達す……………四、武士のなさけ

十七、里見家の一大事……………三〇一

- 一、奸智に長けた素藤……………二、奪はれた若君……………三、義成の出陣……………四、親兵衛義實に逢ふ……………五、素藤の降参

十八、古戦場の大法會……………三二二

目次

四



目次

五

一、逸匹寺の徳用……二、風に飛ばされた賊……三、不思議な石地蔵……四、八犬士の安房へ歸る

十九、巨勢金岡の虎……………三六

一、親兵衛京へ上る……二、徳用の復讐……三、繪から抜けた猛虎……四、親兵衛の虎退治

二十、押寄せた大軍……………三五九

一、毛野軍師に推さる……二、八百八人の奇計……三、赤岩百中と風外道人……四、行徳の合戦

廿一、里見勢の大勝利……………三七六

一、國府臺の合戦……二、強敵併馬三連車……三、火牛の策……四、水軍も大勝利

廿二、榮ゆる里見家……………三九三

一、八人の美姫……二、第二の八犬士

(目次おはり)



八犬傳物語 (上卷)

ヨウネン社編纂

一、安房へ落延びた里見義實

一、父の訓戒

今から凡そ五百年ほどの昔、永享十一年の二月のことでありました。鎌倉管領の足利持氏は、時の將軍足利義教と争つて、遂にその子義成と共に報告寺で切腹して相果てました。すると、持氏に恩を受けた武士達は遺児の春王安王をもちたて、結城の城によつて旗を擧げたのであります。——が將軍義教はそれと知ると、

安房へ落延びた里見義實



どこまでも持氏の一族を亡く積りで絶へず軍勢を向けて結城の城を攻めさせました。けれども忠義一途な城兵達はよく防ぎ戦つて、三年の歳月を持ち堪へたのでした。が、何しろ外から援けのない城のことゝて、やがて兵糧は次第に盡きて、さすが勇士達の意氣も段々と衰へかけて來ました。はりつめた武將の顔にも疲れの色が見へ出してきました。もう結城の城もこれまでだ、と一同は胸の裡で悲壯な決心をしたのでした。

すると嘉吉元年の四月十六日。敵は早朝から今一息と言はんばかり猛烈に攻め立てました。と。總大將の里見季基はいよゝゝ最後の決心を固め、自ら陣頭に立つて、ドツとばかり城門を押開かせました。

『それ、者共進め、結城城兵の刀の斬れ味を見せてやれ』

『最後の軍だぞ！ 木葉武者には眼をかけるな。大將と組んで討死せよ』

と口々に叫ぶ関の聲は物凄じばかり。手に手に白刃を揮つて、怒濤のやうな敵

の大軍の真只中へ、轡を並べて乗り入れたのでした。

城兵が必死で揮ふ切尖も鋭いが、何しろ相手は雲霞のやうな大軍、ビクともせず押しに押し寄せてくるのでした。

今や戦は真最中なのでした。

とその時——たゞ一騎、雪崩打つ敵軍の中を、野分の吹きすぎる様に薙ぎ倒し斬り倒し従横無盡に馳せ廻り、やがて味方の陣所へ歸るかと思ふと、又も近寄る敵を斬り拂ひ、血潮の滴る刀を拭ひもせず、つか／＼と馬を總大將の里見季基の傍へすゝめて息を吐いた一人の若武者がありました。

『お父さま』

それは季基の一人義實なのでした。鞍には血なまぐさい斬首十四五をぶら下げ、矢傷刀傷からはたら／＼と血潮が流れてゐるのでした。

『お、義實、あつぱれちや』





義實は今年十九、行末のある身であるが、今日を限りと思へばこそ、必死の働きをしたのでした。義實は如何にも嬉しげな笑ひを返しました。

季基は眼に涙さへ漂はして、一段と聲を落して言ひました。

「義實、忠義とは死ねるばかりではないぞ。お前の今日の働きはこれで充分だ。さあ、圍みを破つて早う逃げよ。また時がくれば旗を押立て、この仇をとつてくれ」

義實は意外さうな顔で父の顔を打見守りました。季基は更につゞけました。

「これ義實、よう聞け、若しお前が死なば、清和天皇の嫡流、鎮守府將軍八幡太郎朝臣よりつゞく里見の家を、續ける者はなくなるのだ。かつて足利を討つた里見家のあとつぎは、お前より他に人はない。惜しいから落ちてくれ。家の血統を傳へてくれ。この仇を討取つてくれ。死ぬるばかりが忠義ではないぞ！」

「はっ」



語りつゞける間もなく又もや敵の一軍がドツと許り攻め寄せました。季基はそれを見ると「さらばおや！」と一言言ひすて、再び敵軍の中へ斬り込みました。折柄、一陣の風が颯と砂を捲いて吹きすぎました。入り亂れて斬り結ぶ敵味方の上には赤々と夕日が流れました。結城の城はその日の中に落ちて、味方の者は悉く討死を遂げてしまひました。

二、安房の國へ

それから三日目の暮方、相模の國三浦半島の矢取といふ入江の畔に辿りついた二人の旅人がありました。杉の根元に腰をおろした二人の姿はいかにも疲れ果てたやうで淋しさうな影が見へるのでした。大方、金も持たず、食べるものもなく、困つてゐるのでせう。——その二人といふのは誰でもありません。里見義實



と家來の杉倉木曾介氏元なのでした。今一人の家來、堀内藏人貞行が船を探しに行つたのを待受けてゐるのでした。

二人は黙つて腰を下してゐました。入江につゞく青海原は夢のやうに静かなのでした。

沖の方では鷗が、時々眠さうな聲で啼くのでした。水平線には鋸山や、安房の山々が刷毛で刷いたやうに見えます。ほんとうに此處は平和で、どこに戦争があるかと思はれるほどなのでした。——二人はいつまでばんやりと見とれてゐるのでした。

その時、後ろの方で「バタ／＼」といふ音がしたので、思はず二人が振向くと、そこには十四五になる漁師の腕白小僧が突立つてゐるのでした。

「おい、このあたりに船はないか？」
杉倉木曾介が聲をかけました。

「何言つてゐるんだい。戦争つゞきで舟といふ舟は一艘だつてありやあしねえ」
腕白小僧は青鼻を袖で押拭ひました。

「ふむ、それは困つた。おや、船はい／＼から少し喰べる物を持つて来てくれ」
腕白小僧は狡るさうな眼をきよと／＼とさせると「畜生、これでも喰へ！」と言つて、いきなり土塊をとつて投げつけました。

木曾介が素早く身をかはしたので、土塊は松の根元に腰下してゐた義實の胸元へ飛んでゆきました。義實は發止とそれを受止めました。それと見て木曾介はカツと怒つていきなり刀の柄に手を掛けて腕白小僧を追つかけようとなりました。

「よせ／＼、相手は子供だ。戦争には敗けるし、子供には馬鹿にされるし、腹も立つがまあほつとけい、」

義實は木曾介を押とゞめました。木曾介は「世が世なら……」と思つたことでせう、涙をた／＼へて義實の傍へ腰を下しました。





『これ木曾介、昔の本に『土は國の元なり』といふことがある。俺は今、あの子供から土を貰つたぞ。これは國をもらう前兆かも知れない。はつは、縁起がいゝぞ』

義實はさう言つて愉快さうに笑ひ乍ら土塊を差出しました。木曾介は恭々しくそれを押頂くのでした。

その時艫の音が近づいたかと思ふと、堀内貞行がいづれからか船を借りて漕いでくるのでした。待構へてゐたやうに二人は急いで船へとび乗りました。

やがて船は岸をはなれて安房の山々さして漕ぎ去りました。あたりには深く月影がさしてゐるのでした。

三、悪者退治

安房の國は昔、源頼朝が石橋山の合戦に打敗かされた時、こゝに渡つて旗を

挙げ遂に六十餘州を平げたといふ由縁のある土地であります。この頃安房の國には安西三郎太夫景連といふ者が館山に、麻呂小五郎兵衛信時といふ人が平館に、神餘長狭介光弘といふ者が瀧田に城をかまへてゐたのでした。

しかし、神餘の家は大へんに亂れて、この頃山下定包といふ悪者が出て、遂々光弘を殺し、自分が之に代つて勝手な政事を始めようとしてゐるのでした。人民共はこの悪者に大さう困らされてゐましたが、これを討取るやうな強い人がゐないので言ふなりになつてゐるより仕方ありませんでした。

ところへ里見義實主従三人が恰度來合はせたのでした。何しろ八幡太郎義家の十一代の孫だと言ふことを聞いて、百姓共は大へんに喜び、早速義實の許へ集まつて悪者を退治して下さるやうにと頼みました。之より義に富んだ義實のことでしたから立所に承知して悪者征伐に取かゝりました。ところへ元神餘家の家來だつた金碗八郎孝吉といふ者が現はれて、大いに義實を助けたので、一夜にして山





下定包したさだかねの城しろを奪うばひ取ることが出来できました。

そこで義實よしざねは新しくその地ちの領主れいしゅとして人民じんみんたちから崇あがめられることになりました。

四、役えん者ざ

それから幾年いくねんかたちまりましたが、里見さとみの領内れいないはいよ／＼穩おだやかに治おさまるのでした。

そのうち義實よしざねは上線國かきさのくに攝津せつづの城主じやうしゆ、萬里谷まりや靜連じやうれんの娘むすめ五十子いそこを妻つまとしてめとり、一女ぢよ一男なんを儲まうけました。その一女ぢよを伏姫ふせひめといひ、一男なんを二郎らうたろうと申しました。

ところが伏姫ふせひめは生うまれ乍ながら珠たまのやうに美うつくしい子こでしたが、どうしたものか、夜よとなく晝ひるとなく泣ないてばかりゐて、三つになつても、物もの一つ言いはず、勿論もちろん笑わらつたこともないのでした。義實よしざね夫婦ふうふは大さう心配しんぱいして、醫者いしやよ、藥くすりよと三年ねんの間手あひだてを盡つくしたのですが、少すこしも効目きめがないのでした。



すると、その頃ころ安房あは郡ほり州すの崎き明神裏めいじんらに役行者えんのがやうじやといふ佛様ほとけさまがあつてその佛様ほとけさまに願ねがをかければどんな重おもい病氣びやうきでも治なほらないことはないといふ噂うはさがありましたので、義實よしざね夫婦ふうふは大層たいそう喜んで、それからは月々つきごと伏姫ふせひめに多勢おほぜいの家來けらいをつけてお詣りまがにやりましたがやつぱり利きき目めはないのでした。

今日けふはいよ／＼満願まんげんの日ひなのでした。一同どうお祈禱きたうをすましてから、泣なきむづかる伏姫ふせひめを乗物のりものにのせ、あやしすかしつ、お城しろへ向むかつて歸かへらうとすると、八十やそあまりの老人らうじんが通とほりすがり乍ながら聲こゑをかけたのでした。

『おう、これは里見さとみの姫君ひめぎみではございませんか。どれ一つ私わしが加持かぢをして進しんせよ』

お附つきの家來けらいはこの老人らうじんが只人ただひとではないと見てとつて詳くわしく有ありの儘ままを物語ものがたりしました。

『ほうさうか。それは氣きの毒どくだが、これは魂たましいのたゝりだ。不幸ふかうなことだが致いたし



方がない。でも一たい人の運命といふものはかうしたものだ。よいことがあつたとて喜ぶにもあたらさない、悲しいことがあつたとて、悲しむには當らない、歸つたら義實にさう告げてくれ。姫にはこれをお守りに進せよう。ではお大切に――」

老人は懐ろから水晶の珠數を取り出し、それを伏姫の首にかけ、口の中で何事か暫く祈つてから悠々と洲崎の方へ立去つてしまひました。

「お、あれは役行者であらせられたか！」

一同はその後ろ姿を伏拜んだのでした。

その伏姫の首にかけた珠數は、世にも珍らしい水晶で作られてあつて、八の玉には仁義禮智忠信孝悌の文字が一字づゝ透いて見へるのでした。

そのことあつてからといふもの、伏姫はすつかり快活になつて、心もいと賢く淑やかで美はしい少女となりましたので、義實夫婦の喜びは一方ではありません

でした。

五、技平の犬

話し代つて長狭郡富山の里に技平といふ百姓が住んで居りました。技平は正直で良い人でしたがたつた一人生活で、家族と言つては一匹の犬が飼つてあるだけなのでした。ところがその犬がこの頃になつて子を生んだのでした。犬の子と言へば五六匹は生れるものなんです、これは不思議、たつた一匹しか生れないのでした。けれども一つ子は大きき、力が強くなるといふ語り傳へがあるので技平は大いに喜んで、可愛がつてやりました。

ところが七日許り経つと、或る夜狼が忍び込んで、可哀さうに親犬をかみ殺して逃げてしまひました。

技平は一時は怒つて見ましたが、どう仕様もないので子犬を前に倍して可愛が





りました。たゞ、可哀さうなことは乳のないことなのでした。――だが、不思議なことには、子犬はお乳を呑まなくつても少しもひもじさうでないのです。却つて日に丸々肥つてゆくのでした。『はて、これは變だなあ』と技平は不審がりました。

――が、間もなくその譯が分りました。何と驚くではありませんか！

それは夜毎々々に狸が忍び込んで来ては子犬に乳をのませてゐたのでした。

かうして四五十日もして、子犬がひとり歩き出来るやうになると、ぱつたりと狸は姿を見せなくなつてしまひました。

すると、里見義實の家來の堀内貞行がこの話を聞いて、さても不思議なことがあるものだと、わざ／＼技平のところへ尋ねて来て犬を見ましたが、如何にも伶俐さうな立派な大きな犬だつたもんですから、すつかり感心してこの事を主人の義實のお耳に入れました。



二、天晴れ八房の殊勳

一、卑怯な景連

その年の秋になると里見義實の隣國、安西景連の領地ではどうしたものか少しも穀物が獲れませんでした。このまゝ打棄てておいては人民が餓死をしてしまふばかりなので、殿様の景連は家來の燕戸訥平を里見義實の許へ遣はして、米を五千俵かして下さいと申出でました。

すると、金碗八郎孝吉の子の金碗大輔孝徳といふのが、義實に對つて言ひました。

『あの安西景連といふ奴は人も知る通りの大悪人ですから、今こそ好い機です。一時にドツと兵をお向けになれば譯なく打滅してしまふことが出来ます。』



義實はそれを聞くと言葉を荒らげて言ひました。

『たとへごんな悪人にしろ、對手が困つてゐるところにつけ込むといふのは卑怯極ることだ。安西景連は悪者とはいへまだ自分に對して何も悪いことをしてはゐない。早速、五千俵の米を送り届けてやるがいつ。』

鶴の一聲——義實の言葉には誰も背く譯にはまゐりませんので、やがて五千俵の米を隣國の安西景連の許へ送り届けられました。

——ところが、その翌年になると、今度は里見の領内では一粒の米も獲れないのでした。それに反して隣りの安西領では例年になく大豊作でしたので、義理でも景連の方から何とか言つて來るだらうと待つてゐたのですが、何の音沙汰もないのでした。そこで、殿の義實は金碗大輔孝徳を遣はして、去年貸した米を返してくるやうにと、催促をさせることにしました。

やがて、金碗大輔孝徳は八人の家來を従へて安西の城に乗込み、家老の燕戸訥



平に面會して、そのことを申入れましたが、燕戸訥平はいろいろ言を左右に托して容易に承知をしないのでした。大輔は氣が氣ではありませんでしたが話しが捗らないので遂五六日をすごしてしまひました。

『これはどうも怪しいぞ。』——大輔はさう思つて密かに城中の様子を探つて見ますと、こは如何に、大勢の軍兵達は鎧を身にまといつて武器を手に執り、雪崩を打つて何處へか押出してゆく有様なのでした。どうやら戦争でも始まりさうな様子です。大輔は、

『これは大變だ。』と吃驚仰天して、それ／＼家來達に變装をさせ、一人二人と城を抜け出しました、燕戸訥平は早くもそれと知るとヒラリと馬に飛び乗り、多勢の軍勢を従へて大輔の跡を追ひ駆けました。

『待て——大輔、わが殿は既に三千の軍勢を率ゐられて、はや東條の城を乗取り今は瀧田の城を包んでゐらせられるぞ。もはや、袋の鼠ちや、命が惜しくば降参



をしろ。』

聞くより大輔は嚇と憤つて、

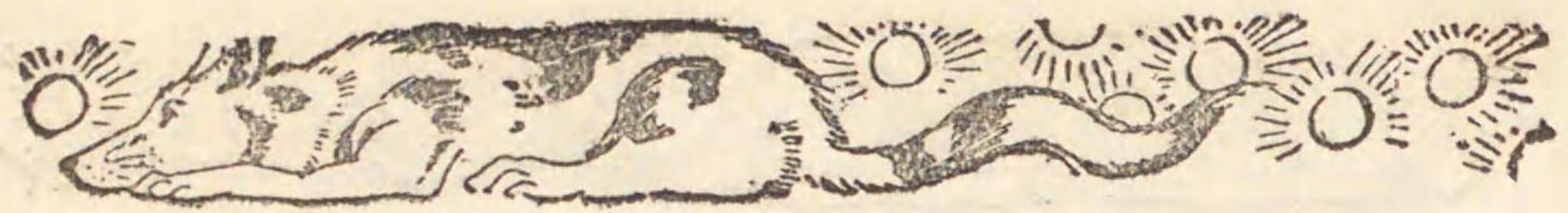
『え、つ卑怯者奴！ よしこの上は汝の素つ首引つて抜いて手土産にしてくれんそこ動くな。』

と言ひさま、槍ふりかざして、雲と群る敵の中へドツとばかり躍り込みました。大輔主従の者は縦横無盡に斬つて、斬り捲くりましたが、何しろ敵は大勢新手々々に入れ換はつてくるので果てしがありませんでした。やがて、かれこれ三十餘人も斬り伏せたと思ふ頃には、味方の者も仆れて、今は大輔唯一人となつてしまひました。大輔は必死の覺悟で訥平目がけて斬りつけようと思ひましたが、雑兵に妨げられて、それも果たし得ませんでした。

二、八房と義實

一方、安西景連の指揮する三千の軍勢は大海嘯の如く里見領に攻め入つて、瀧田の城を十重二十重に取圍んでしまひました。又、蕪戸訥平の率ゐる一隊は堀内貞行の立籠つてゐる東條の城に押寄せ、いやが上にも攻め立てました。——里見方の者はいづれも不意討なので面喰つてしまひました。しかも、米は無いと來てゐるのですからやり切れません。城兵達は七日間といふもの一粒の飯も喰はずに過しましたが、遂に堪りかねてこつそりと城外へ忍び出て敵の兵糧を奪つて喰べたり、或は馬を殺して啖つたり、死人の肉をたべたりして一時を凌ぎました。こんな慘な有様なのでしたが里見方では却つて敵愾心が燃へ上るばかりでしたので仲々降服はしませんでした。

城主の里見義實は家來達のかうした不愼な有様を見るにつけ腸を扶られる様に辛くつてなりませんでした。そして、自分の命は失くなつてもいゝから、どうかして家來達を助けてやりたいと思ひました。或ひはこのまゝ敵の中へ斬り込んで





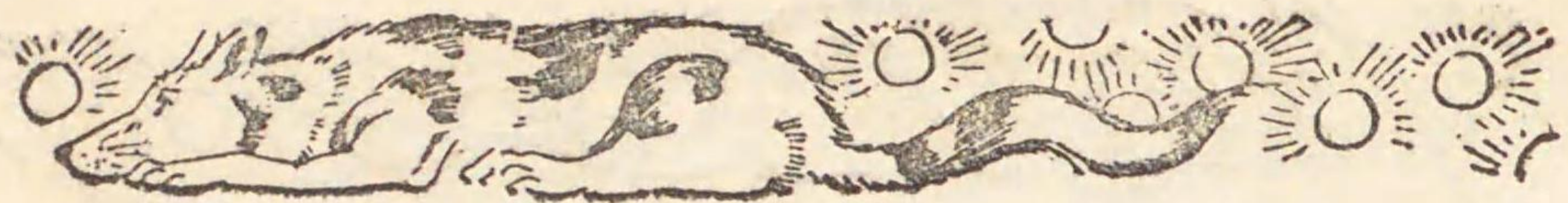
見事に討死を遂げてしまはうかとも思ひました。

義實があれこれと思案に暮れて奥庭を歩いてゐると、その時、ヒョロ／＼と眼の前へやつて来たのは八つ房でありました。見ると、肉は落ち、眼は凹んで、骨ばかり出つ張つて狼のやうに痩せ衰へてゐるのでした。

義實は犬の頭を撫で乍ら思はず泣きました。

「お、八房、お前も餓じからう。城内の者も今日で七日食はないのだ。まして畜生のお前だから餓じいのも無理はない可哀さうに。……さうだ。犬と言へば恩を忘れぬものだと言はれてゐる。これ八房、お前も若しや受けた恩を忘れぬなら、敵陣へ忍び込んで、あの憎くい安西景連を咬み殺してくれぬか。……はつは、こんなことを言つてもお前には分るまいな。」

義實は笑ひ乍ら立去らうとしました。すると、八つ房はスタ／＼と義實の前へ廻つて、顔を見上げ乍ら頻りに打合點いて見せるやうな素振りをするのでした。



義實にはそれが今の言葉に對する返事のやうに思はれましたので、又もや、立止つて話しかけました。

「お、八房、お前にはわしの言ふことが分るのか。よし／＼、それではお前が景連の首を見事奪つて来たなら何を褒美にやらうかなあ。毎日毎日魚をくれようか。いゝだらう。」

すると、八つ房は首を横に振つて見せるのでした。

「ほういやか、では役人にしようか。領地をやらうか？ それもいやか。困つたなあ……お、では伏姫をやらうか。」

——八房は最後の言葉を聞くと、急にうれしそうに尾を振り立てましたが、やがて、義實のまわりを二三度グル／＼と廻ると、そのまゝ矢の様に素早く城外の方へ走り去つて姿を消してしまひました。

義實には八房の様子は何となく薄氣味わるく思はれました。そして、淡い後悔



の念と共に（戯談とは言ひながら、詰らないことを言つたものだ……）と胸の裡で呟き乍らトボトボと歩きだしました。

三、敵將の首

いよいよ最後の秋は來ました。

七日間といふもの、食はず眠らず戦ひつゞけた里見方では、今宵月の沈むのを合圖にいさぎよく敵陣に斬り込んで、花々しい最後をとげようといふことに決心が一致したのでした。

義實はじめ、奥方五十子、息女伏姫、嫡男義成、その他一族郎黨たちは城中の一室に集つて最後の酒宴をひらきました。酒宴といつたところで酒のあらう筈はありませんから、盃に水を汲んで飲み交はすのでした。これが今生の別れだと思ふと誰の眼がしらにも涙の露が光るのでした。蠟燭の灯影さへかなしげに仄暗



く瞬きました。

家來たちは胸が迫つて口も利き得ず木像のやうに黙然と控へてをります。庭の方を見やると、うす青い月影がぼんやりとあたりを照らして、安房の山々は眠るが如く横たわつてゐるのでした。

やがて、月は名残り惜しくもその姿を山の端にかくしてしまひました。

と同時に義實父子は『いざ、出陣ぢや』と聲をかけて立上りました。そのうしろには奥方の五十子と伏姫とが女乍らも甲斐々々しい扮装で、長刀掻ひ込んで立つてゐるのでした。家來たちはそれを見ると頓に勇氣百倍するのを覺へるのでした。

——と、突然、その時、ワン／＼／＼ウーワン／＼／＼といふ氣魂しい犬の聲が庭の方でしました。

義實は早くも聞きつけて『八房ではないか。』と叫びました。お傍の者はすぐさ



燭をさし上げて立上ると『八房、八房』と呼び乍ら庭の方へと出たが、障子を開けると共に『呀っ』と聲を立てました。おゝ！そこには八房が生々しい血潮の滴たる生首を口に啣へて、踏石に前足かけてゐるのでした。

大勢の者は忽ち集つてくると『やつ、これは誰の首だ』味方が敵か』犬も腹が空いたので死人の首を喰ふ氣なんだらう。』など、言ひ合ふのでしたが、たゞ一人義實だけは胸のうちで何事か打合點き乍ら件の首を打眺めてゐるのでした。

『これ木曾介、この首は景連によう似とる。洗つて參れ。』

義實がさう言ひつけると、木曾介は直ちに家來に水を汲ませて來て洗つて見ました。と果して、紛ふ方なき敵將安西景連の首でしたので、居並ぶ人々はあまりの意外に呆然としてしまひました。義實は腕を拱いて深く考へ込んでゐる様子なのでした。

そこへバタ／＼と注進の者が走り込んでまゐりました。



『何ぢや？』

義實が振り返りざま、たづねると、

『ハッ、只今櫓の上より物見いたして居りますると、不思議にも敵の陣中俄かに騒ぎ立つた様子でござります。』

と、注進の武士は平伏して申しました。

『ふむ、さうか。』義實は打領くと、更に聲高らかと命令を下すのでした。

『さあ、敵は大將を失つて狼敗へて居るぞ。この機を外さず突いて／＼突きまくれ！』

聲に應じて城内は忽ち動搖めきわたりました。やがて、城門がバツと開かれると、城兵は騎虎の勢ひで躍り出して、當るを幸ひ薙ぎ倒し斬り倒し馬の蹄にかけて踏み躪りました。その雄々しさ勇ましさ迎も七日も飯を喰はずにゐた人達とは思はれませぬ。うろたへてゐた敵兵共はいよ／＼慌て、右往左往逃げまはりまし



たが、やがて、夜の日む頃になると、山なす敵の死骸と、うづ高い分取品を残して、一千人ほどの敵兵は残らず降参してしまひました。勝ちほこつた里見方では、次の日に東條の城へ多さんの援兵を遣はして、譯なく敵軍を打破つて蕪戸訥平の首を討取つてしまひました。かうして里見義實は不思議な勝戦で敵を打敗り、やがて、安西の領分をも手に入れて、安房の國主として立てられるやうになりました。するとその頃、幸ひなことには、先に切腹を仰せ付けられた足利持氏の末子成氏が、鎌倉へ歸つて關東管領の職を繼ぐことになつたのでした。持氏の恩顧を蒙つてゐた里見家にとつてはそれはどれ程喜ばしいことか知れませんが。それからといふもの義實はだんく出世をして、その一家は益々榮へました。

四、狂つた八房

ところで安西のもとへ遣はした金碗大輔はその後いくら待つても歸つて來ないのでした。義實は大層心配をして、家來をあつちこつちへやつて探させて見ましたが、どうしても分りませんでした。——で、多分戦死したことだらうと諦めて義實はこんどの合戦で手柄のあつた家來たちにそれく褒美をあたへました。中でも八房は第一番の大きな手柄を樹てたといふので、それからは下へも置かず、立派な邸を建て、絹の布團を敷かせ、三度々々御馳走を喰べさせ、家來を多勢つけさせて、外を出あるく時などには行列を作つて『下に〜』といふやうな大した待遇方をいたしました。——けれども、どうしたものか八房は一向嬉しさうな様子をしてないのでした。そして、毎日飲まず喰はず眠らず、悄れ返つた姿で義實の姿を探しては、何事かを訴へるやうな顔附をするのでした。義實は、恨めしげにヂツと見詰めてゐる八房の顔を見る度に胸がギクリとするのでした。そして、だんく八房の姿を見るのが恐しくなつて、成可く犬に會は





ぬやうにと努めましたたが、やがて、家來に言ひつけて眼にとまらぬやうなところへ八房を遠ざけてしまひました。

遠ざけられた八房は裏庭の木の根の下へ嚴重に鎖で縛りつけられてしまひました。

八房は毎日々々悲しさうにキャン／＼と鳴きつゞけましたが、可哀さうに遂々氣が狂つてしまひました。

そして、或る日のこと、鐵の鎖を噛み切ると矢庭に番人の武士を啖み倒し、ヒラリと御殿の椽側へとび上つて、彼方此方を吠へ乍ら駆けめぐり初めました。それと知つて殿中の女子供たちは聲をあげて逃げ惑ふのでした。八房はますます猛りたつて追ひかける。襖は倒れる。火鉢はころがる。——今や、御殿は沸きかへるやうな騒ぎとなりました。

やがて、八房は遂に伏姫のある奥座敷へ躍り込みました。——その時、姫は丁



度机へ向つて『枕の草紙』を繕いてゐたのでしたたが、ふと、うしろの方で騒がしい物音がすると思ふ間に、いきなり床の間にたてかけてあつた筑紫琴を横様に押し倒して、何やら黒いものが飛ぶやうに跳り込んで來たのが眼に這入りました。ハツと思つてよく見ればそれは八房なのでした。八房は嬉しさのあまり夢中になつて姫にとびかゝりました。姫は立ち上らうとしましたけれども、小牛ほごもある大きな犬のこと故、忽ち『あつ』と押し倒されてしまひました。

この時、義實は手槍を引提げて怒りに燃え乍らツカ／＼と這入つてくると、『おのれ八房、日頃の恩も忘れて主人に仇をなすか、えゝッ、許しはせぬぞ！』と叫んで、槍を振立て、追ひ立てようとするのでしたたが、八房は平然として動かうともしないのでした。尙ほも追ひ立てようとするのでしたと、爛々たる眼を剝いて、牙をならし、今にも噛みつかん許りの形相をするのでした。

義實はいよ／＼憤つて、



「己れ、恩知らず奴、思ひ知れ！」

と叫びざま、たゞ一突きとばかりユウリユウと槍をしごきました。

一同は生きた氣持もなく、固唾をのんで打見守つてゐるのみでした。

その時、伏姫はやつと氣がついて、

「お父上さま、しばらくお待ち下さいまし……」

と言つて義實の槍を持つた手もとにすがりつきました。

三、山へこもつた伏姫

一、富山の奥へ

思はぬ椿事のあつた里見の城内も、やがて夜の帷に閉されて寂然としてしまひました。その頃、裏門がギイと軋つて開くと十人ほどの黒い影が闇に紛れて城外

へ出ました。馬に打またがつてゐる武士の姿も見えます。やがて、一同はピタと足を止めると、打かたまつて囁き合ひ歎歎の音さへ洩らすのでした——それも無理はありません。安房の國主、里見義實の愛娘、伏姫が今こそ八房に伴はれて何處へか立去らうとするのです。

義實は一時は嚇として犬の狼籍を怒つて見ましたものゝ、よくよく考へて見れば自分が約束を違へてゐたことに氣がつかしました。例へ相手が畜生にしる約束を違へるといふことは良くないことです。武士の言葉に二言はない筈だ……さう氣がつくと義實は、涙を揮つて愛し娘の伏姫を八房に與へることに決心したのでした。——が、今やいよく別れとなると、さすがに胸が痛むのでした。伏姫のお母さんの五十子、弟の義成、老臣の氏元、その他の家來一同誰一人として涙を堪へぬものはありませんでした。殊に母親の五十子はせめて姫の行先なりと知りたものと、藩中でも特に武勇に秀でた蜚崎十郎輝武に幾人かの武士を附き従はせ





て、ひそかに姫の跡を尾けるやうに云附けたのでした。

八房はと見ると己が望みが叶つたので如何にも嬉しさうに尾を振り乍ら姫の周圍を走り廻つて、一時も早く旅立ちを急ぎ立てゝあるやうな様子なのでした。

いくら経つても名残は盡きません。では、と言ふので伏姫はやがてトボトボと足を進めました。手には法華經一卷を持ち、首には水晶の珠数をかけ、見るから崇峻い姿なのでした。八房は尾を振り乍ら前になり後になりして走りました。その姿が消えてしまふまで義實初め一同は涙を堪えて見送つてをりました。

八房は瀧田の城下を離れると、伏姫を自分の背中に乗せて、府中の方目ざして疲風のやうに走りました。一方、蜷崎十郎輝武以下数名の武士は馬に打乗つて見えつ隠れつ八房の跡を尾けたのでした。一騎おくれ二騎おくれ、遂に輝武たゞ一騎となつてしまひました。それでも輝武は屈せず撓まず跡を追つて、遂に夜の白みかけた頃に、富山の奥へ分け入りました。——この富山といふのは安房の國





第一の深山で、樹木鬱蒼と蔽ひ茂り、人跡未踏と稱されてゐるのでした。輝武はやがて馬を乗り捨てると、絶壁斷崖を攀登りました。すると、彼方山の頂に伏姫と八房の姿がチラリと見へましたので、やれ嬉しやとなほも勇を鼓して進むうちにとうとうと、迸り流れる谿流の畔へ出ました。何のこれしきものと言はんばかり輝武はヒラリと流れの中へ身を躍らしましたが、案に相違して流れが強かつたので、忽ち押流され、岩に頭を打着けて、哀れ息絶へてしまひました。そこへ、遅れ馳せにかけつけた家來達は、その有様を見ると忽ち勇氣が挫けた。輝武の死骸をかゝえて城中へ戻りました。城中では殿の義實初め一同そのことを聞いて、大へんに嘆きました。採るべき手だてとてないので、そのまゝ、打過しました。

二、不意の發砲

鳥の聲と、風の音と、谷川のせゝらぎの他に何も聞えないこの山奥に、此頃、いづくからか朗らかに法華經を誦する美しい聲が、夜となく晝となく聞へるのでした。その聲の主こそは他でもありません。時めく里見義實の愛娘、伏姫が唱へてゐるのでした。

伏姫は八房に伴はれて、この山奥の洞穴の中におろされたのでした。洞穴は巨きな岩の横腹に抉つたやうに作られて、あたりには森森と樹木が生ひ茂り、晝でも薄暗いやうなところなのでした。

伏姫はこの穴の中で、世を捨てた人のやうに何事も諦めて、毎日々々法華經の一卷を讀み返しくして暮してゐるのでした。

八房は、毎朝起きると山を下つて、木の實や蕨の根などを採つてきては伏姫におすゝめをし閑な時には伏姫の傍にチョコンと坐つて、一心にお經の聲に耳を傾けてゐるのでした。畜生乍ら尊い御佛のお教へがどうやら分りかけてきたらしい





のでした。

かうして同じことばかりを繰返してゐるうちにその日その日は経つて、いつか一年ほどすぎました。伏姫は何事も諦めてはゐるといふものゝ、花が咲いたり、雪が降つたりするのを見るにつけ、父母のことや、城下のことや、幼い時のことなどを思ひ出してぼんやりと物思ひに沈むのでした。こんな月日を送つてゐるよ、いつそ一思ひに犬を殺し、自分も谷川へ身投げをしてしまはうかしら？ なんと思ふことも度々あるのです。

伏姫はその頃花も香しい十七歳の年齢でありました。にも係らず着のみ着まゝのことですから、着物は垢のつくまゝ、破れるがまゝなものでした。が、持つて生れた美しさは不相變花も欺かんばかりでした。

今日しも伏姫は、形ばかりの机に向つて經文を讀んでゐるのです。八房は傍らにかしこまつて一心に聞き入つてをります。



やがて、姫が一段と聲を張り上げて『三千衆生發菩提心、面得受記』といふあたりまで讀んでくると、突如、彼方の山の方で轟然と銃音が響いたのでした。ハツと思ふまゝありませんでした。ビューツと唸りを生じて飛んできた二發の銃弾——一つは八房の咽元を貫きましたので『きやんきやん！』と一聲叫んで打倒れました。今一つは伏姫の乳の下を貫きましたので、アツと一聲たてゝ、經文手に持つたまゝ、姫は横ざまに打倒れました。

すると不思議——今まで帷のやうに籠めてゐた霧が見る／＼霽れて、はるか彼方から一人の獵師が鐵砲片手に川瀬を渡つてくるのが見へるのでした。そも／＼その獵師は何人でせうか？

三、獵人姿の大輔

——ところで、忠義者の金碗大輔は、その後どうしたことでせうか？



大輔は安西景連の軍勢に取巻かれたあの日、たゞ一人となつて奮戦をつゞけたのでしたが、(いや、こゝで討死をしては犬死も同然だ)と、氣が附くと、一方の血路を切り拓いて逃げのびたのでした。ところが漸々瀧田の城まで辿りついて見れば、早十重二十重に敵軍が取圍んでゐて蟻の這入る隙間もない有様。で、すぐその足で東條の城へ行つて見たのですが、そこも既に敵軍に圍まれてゐます。大輔はハタと困りましたが、ふと思ひついて、大急ぎで鎌倉へ渡ると、時の管領足利成氏に願ひして、援兵を貸して貰ひたいと申し出ましたが、義實からの手紙がなくつては……といふ理由の許で断はられてしまひました。大輔は落膽して仕方なく、安房の國へ歸つて來ました。ところが案じたほどもなく、敵方はすつかり打敗かされてゐるのでした。——と言つて大輔はこのまゝオメ〜と城中へ戻るにはあまりに面目ない心地がいたしました。切腹してお詫びをしようかと思ひましたが、それも犬死のやうに思はれました。で、結局(まあ、時節を待



つてお詫びをしよう)と言ふことに心を決めて、一先づ、下總の國へ行き百姓に身を装つて秋の來るのを待ちました。

と、やがて、伏姫が、八房と共に富山の奥へかくれてその後何の便りもなく、今ではその母親の五十子が、心配の結果、頭も上らぬほどの重病に取つかれてゐるといふことが風の便りで耳に入りました。聞いて大輔は(いよ〜吾が忠節を表はす可き秋は來つた!)と思つて勇み立つたのでした。そして、少しの餘猶もなく、獵師姿に身をやつし、鐵砲引提げて旅立つたのでした。

ところが、里見の領内へ這入つて見ますと到るところに『富山へ踏入る者は何人とも斬罪に處すべし』といふ張札がしてあるのでした。これは、もし人に見られたなら、伏姫がはづかしがるであらうから……と言ふ、義實の心づくしからないのでした。

大輔は殿の命令に背く譯には參りませんので、一寸躊躇ひしましたが、大きな忠



義をする爲めには小さな不忠位は致し方がないと思つて遂に心を定め山の奥へと分け入りました。

九十九折の山路を傳はつて彼方此方と探しまわりましたが、どうしても姫の姿は見つかりませんでした。で、その晩は森の木蔭で雨露を凌ぎ、明くる日は又終日尋ね廻りましたかうして、五日六日たづね歩きましたが、一向それらしい影は見當らないのでした。大輔はへとくへに疲れてしまひましたが、斃れて後已むの堅い決心の許でなほも探しつゞけました。

と、或る日のことでした。大輔が山頂に近い崖路を喘ぎく登つてゆくと、ふと、人間の聲らしいものが風に乗つてかすかに耳に這入つたのでした。ハテナ？と思つて大輔は思はず耳を敬てました、暫らくすると、又してもかすかに聞へました。今度は確かに人間の聲で、しかも、どうやら若い女の聲らしいのでした。めた！と思ふと大輔は疲れも何も打忘れて人聲を便りに足をすゝめまし

た。やがて、だんくと近寄るに従つてその聲は伏姫の聲とそっくりだと云ふことが分りましたので、大輔は雀躍りせんばかり大喜びでした。その時、やつと崖路を上り切りましたので、待構へてゐたやうに山頂の彼方を振仰ぐと、果して經文を讀んでゐる姫の姿と、八房の姿が眼に這入つたのでした。

『え、つ、已れ、八房め！』

大輔は思はず怒りにかられて、鐵砲手に取るより早く、つゞけさにまボンくと撃ち放しました。

四、飛び散つた珠

こゝで話しは前へ戻ります。

大輔が鐵砲を射放すと同時に『きやんく！』といふ犬の悲鳴！

大輔は雀躍りをしながら、谷川を渡り、猿のやうに身輕に山の頂さへ辿りつい





たのでした。と、見ると、八房は血潮に塗られて悶き苦しんでをります。

『え、つ、己れ、憎くい奴め！』

大輔は聲打顫はして叫ぶと、續げざまに八房目がけて五六發も打放したので、何條堪りませうや、八房の骨は擡げ、皮は破れ、無慘な死態を遂げてしまひました。吻とした大輔は、その時漸度氣がついて『して、伏姫は？』と呟いて四邊を見廻しました。見れば、そこには、伏姫が同じやうに血潮に染んで打倒れてゐるのではありませんか！ あまりの思ひがけないことに、大輔は氣も顫倒せんばかりに打愕きました。

「も、もし、伏姫さま、伏姫さま、しつかり……」

大輔は聲の限りに叫んで伏姫を抱き起しました。調べて見ると、幸ひに傷口は浅い。大輔は直ちに藥を取出して、姫の唇へ含ませ頻りと呼びたてたのですが、その効もなく伏姫の體はだん／＼冷くなつてゆくのでした。

大輔は力無く姫の體を下へ置くと、思はず天を仰いで嘆息いたしました。

『あ……』

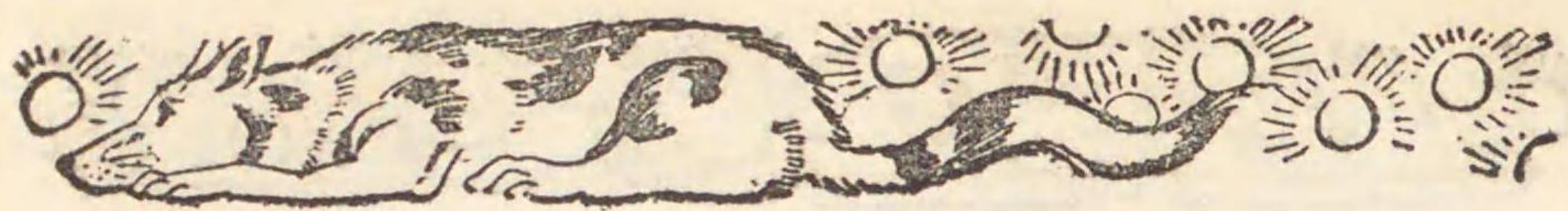
彼の双眼からは止度なく熱い涙が迸りました。

「あ、申譯ないことを致した。折角の志も悉く水泡に歸し不忠の上塗りを重ねるばかりぢやつた。お、この上は、生きて効のない身ぢや！」

遂に大輔は最後の決心をし、いきなりバツと双肌を押脱ぐと、遙か瀧田の城の方を伏し拜み、腰の一刀スラリと抜くより早く、アワヤ脇腹へ突き立てようとなりました。——と、その時でした。傍らの松の木蔭からピエーツと唸つて飛び出した一條の矢、今しも切腹しようとする大輔の右の臂を危く掠めて傍へにバタリと落ちました。ハツとして大輔に思はず太刀を落しました。

『大輔、はやまるな、暫く待て！』

その時、突如、うしろの木がくれから聲高く呼ぶのが耳に入りました。大輔は





二度びつくり、狼狽へ乍ら振向けば、おゝ、誰あらう、里見治部大夫義實と、それにつゞく掘内藏人貞行がノシノシと現れ出たのでした。

大輔は面目なげな様子でしたが、やがて聲もおろろくに『死におくれました申譯がござりません……』と前置きして、一伍一什を残らず涙乍ら申上げました。

すると、義實は打合點いて、

『言ふな、すべて天命ぢや。天命には勝たれない。——その方の赤心はよう分つて居る。』

と、優しい言葉を下されるのでした。

大輔はいよゝゝ絶え入るやうに歎歎くばかりでした。

やがて、三入は『せめて今一度、祈つて見よう、至誠が神に通じれば叶へて下さるであらう』と話し合つて、伏姫の襟にかゝつた水晶の珠を取り上げ、役行者の名を唱へて、三人は一心に聲上げて禱りました。——と、やがて、靈驗忽ち



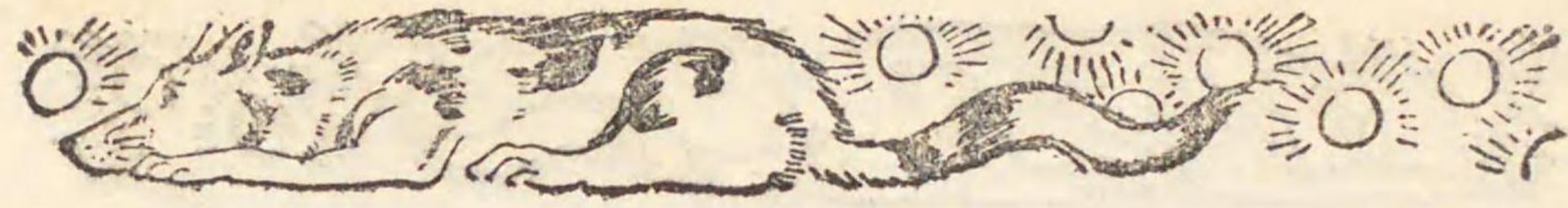
現はれてか、姫はばつちりと眼を睜り、ホツと一息吐きました。貞行、大輔の兩人は思はず駆け寄り『姫上、々々！』と左右から呼立てました。姫はやつと心付いたと見え四邊を見廻しましたが、やがて、二人の手を振拂ひ、袖を顔に押あてゝさめゝと泣き伏しました。

その時、義實はツカ／＼とすゝみ寄ると、

『姫よ、嘆くな。こゝにはこの三人きりだ。さあ一緒に参らう、瀧田には母がその方のことを心配して居るぞ。』

と、言ひましたが、姫は身も世もあられないやうに身悶へをすると『今、このやうになつた身を……これを、見て下さいまし。』と言ひ乍ら、いきなり護身刀の鞘を打拂ひ、抜く手も見せず、腹へグサツと突立て、眞一文字に掻き切りました。

アツと叫んで三人は駆け寄りましたが、これは不思議——傷口からはムラ／＼



と一群れの白い烟が立騰つたかと思ふと、襟にかゝつた水晶の球数を包んだまゝ、空中高くフワリ〜と舞ひ上るのでした。

やがて、珠数の糸は空中に浮んだまゝ、フツツと断ち切れました。と、澤山の小珠はバラ〜と地上に落ちました。しかし、八つの大珠は落ちようともせず空に浮んだまゝ、ピカリ〜と眩しい光りを放ち乍ら、入り亂れ、飛び交ひつゝ、星の流れるやうに流れてゆくのでした。

主従三人の者は、只々飽氣にとられてアレヨ〜と言つて見送るばかりなのでした。伏姫も深傷を打忘れて、飛びゆく光りを見送つて、顔いつぱいに嬉しげな微笑をたゝえてゐたのですが、やがて、徐々に双の眼を閉しました。

折柄、颯と吹いてくる山風に入つの光りは八方に散り失せ、後は山の端に、夕日が仄かに匂つてゐるのみでした。

× × × × ×



金碗大輔は、その日から頭を剃つて僧侶となり、墨染の衣を身に纏ひ、名も犬の字を二つに分けて、大と名乗り、日本國中を廻り廻つて、飛び散り失せた仁義禮智忠信孝悌の八つの玉を探し尋ねることゝなりました。

この時、大輔の年齢は二十二歳でした。

飛び散つて失せた八つの玉は何處へ行つたことでせうか？ 果して、大輔はそれを探し出して、元の珠数としてつなぐことが出来るでせうか？

四、犬塚信乃と犬川莊助

一、番作と手束

武藏の國大塚といふところに犬塚番作一成といふ浪人が住つてをりました。番作は近所の子供達に手習ひを教へ、妻の手束は縫ひ物などをして、細々と暮しを



たてゝゐるのでした。——一體、この番作といふ武士は舊の名を大塚番作と言つて、若い頃は關東管領の足利持氏に仕へてゐたのでしたが、運命拙く一朝にして主家が滅亡すると共に、僅かの命を長らへて、ごうかしてこの復讐をしたいものと、姿を忍んで故郷の大塚へ立戻つたのでした。

故郷にはたつた一人の腹達ひの姉の、龜篠と言ふのがゐたのですが、この姉といふのが腹黒い女で、弟の番作はてつきり討死をしたものと思つて、大塚の家屋敷をすつかり乗取つてしまつたのでした。そこへヒヨツクリと番作が歸つて來たので、姉の龜篠は一時吃驚しましたが、根が悪人のこと故、冷淡な様子をして取合はうともしないのでした。

けれども番作は姉を恨む様子もなく、それから大塚を犬塚と稱び改めて、村の人々の情けに縋つて暮しました。——かうして、番作夫妻の暮しは貧しい乍ら極めて平和でしたが、たゞ一つ心細く思はれることがありました。それは二人の



間に子供がないといふことでした。尤も全然なかつた譯ではなく、今までに男の子を二人も生んだのですが、ごうしたものとみなな亡くなつてしまつたのでした。妻の手束はこのことが一番悲しかつたのでした。そして、瀧の川の辨財天にどうか子供を授りますやうにと願をかけ、三年の間雨が降らうが、風が吹かうが一日とて欠かさず詣りつゞけました。

すると、長祿三年の九月二十日、恰度伏姫の亡くなつた明る年のことでした。例に使つて手束が辨財天へお詣りをして歸りがけ途中まで來ると、しきりにキヤン／＼と言ふ啼聲が聞えるのでした。近寄つて見ると、それは一匹の小犬でした。手束が立去らうとすると小犬はごこまでも尾いてくるのでした。手束は可哀さうになつて、その小犬を抱き上げようと思いました。

——と、その時、南の方から一條の紫色の雲が眩しく輝き乍ら棚曳いて來たかと思ふと雲の中には、一人の姫が大きな犬の背に腰打掛け乍らキラ／＼と輝く玉



を左手にさゝげてゐるのが鮮々と見へました。そして見る／＼姫は一つの玉を取上げて發止と手束の方目がけて投げつけたのでした。……同時に、手束はくらくと目眩がしてしまひました。

やがて、手束はフト吾に返つて眼を開き夢心地で四邊を見廻したのですが、これは不思議、姫の姿も犬の影もいつの間にか消え失せてゐるのでした。勿論、投げつけられた玉の行方も知れませぬ。

手束は不審に思ひ乍ら、犬の子を抱いてわが家へ房りました。と、それから間もなく、思ひがけなく大きな男の子が生れたのでした。

二、孝子信乃

さあ、二人の喜びつたらありません。昔から、男の子の育たない家では、女の名をつけるといふと言ふことが言ひ傳へられてゐますので、番作はその男の子に



信乃といふ女らしい名前をつけ姿まで女のように装せました。

すると近所の者は『武士にするのが怖いから、女名前をつけたんだらう。』などと言つて嘲り笑ひましたが、番作夫婦は耳にも入らぬ様子でいつくしみ育てました。

姉の龜篠の亭主を墓六と言ひました。墓六の家ではやはり子供がありませんでしたので番作の家で子供の生れたのを見ると羨ましくなつたと見え、知り合ひのところから、三歳になる濱路といふ女の子を貰ひ受けて、これ見よがしに金に飽かせてかざり着けさせました。

やがて信乃は恙なく生ひ立つて九歳となりました。體付はいと逞しくがつしりとしてゐるのですが、不相變女の着物を着て櫛簪をさし、そしていつも餓鬼大將となつて風揚げとか、合戦ごつことか、竹馬ごか言ふ荒々しい遊び事ばかりに耽るのでした。父親の番作は大いに末頼母しく思つて、手習ひをさせ、軍學の講



義を聴かせ、或ひは劍術の稽古等をさせました。信乃は元より利潑の性でしたから見る／＼上達しました。

又、武士になるには馬術を習はなくては不可ないといふので、母がいつぞや拾つて來た小犬——今では大きな犬になつて名を與四郎（四足が白いから四白です）と言つてゐます。これに打またがつて近所を暴れまはるのでした。

ところが、その年の秋になると、母の手束がふとしたことから枕も上らぬ程の大病に取つかれました。番作と信乃は大層心配して夜の眼も眠らぬほどにいろいろ手を盡しましたが、どうしたものか些しの効目もなく、日にまし重くなる一方なのでした。

或る日のこと、番作は信乃に言ひつけてお醫者さまの家へ薬を取りにやつたのですが、どうした理由かその日に限つて仲々歸つて來ないのでした。やがて日も暮れかゝりましたので氣を揉み乍ら、何氣なく障子を開けて見ると縁側にはちや

んと薬箱が置いてあるのでした。

『ほゝ、こゝに薬箱があるわい、仕様のない奴だ。薬だけ置いて又何處ぞへ遊びに行つたと見えるわい。』

番作はさう呟いて薬を妻に飲ませました。あたりはだんだんと暗くなりました。それでも信乃は歸つて來ませんでしたので、番作はそろ／＼心配をしました——と、その時裏口からのつそりと這入つて來たのは糠助といふ知合ひの百姓でした。左手には釣竿と魚籠を持つてをります。番作がつと眼をやるとその背後には信乃が青い顔をして悄然と立つてゐるのでしたから、思はず聲をかけました。

『おゝ、お前は信乃ではないか？』
それを遮つて糠助が語りつゞけました。

『番作どん、どうもお前さんとの息子ごんには感心しちまつたよ、まあ聞いておくんなせえ。實は今日骨打みた神谷川へ行つたよ。すると、ごん／＼釣れるだ





で、だん／＼上流へ行つて、あの瀧の川へ行つた。すると、まあ、この息子ど
 んが、不動の瀧に打たれながら手を合はせて立つとるぢやあねえか。俺はぶつ魂
 消て、急いで飛び込んで行つて引き上げたが、もう冷たくなつて息もとまつて
 ゐるだ。これは大變と、火を焚くやら、薬を飲ますやらしてやつと助けた。聞
 けばお母親の病氣が治ります様に、願をかけてゐたさうだ。ほんとに十歳や
 そこの子供にしちや、感心なこつちやねえか。俺は泣かされた……』
 言ふだけのことを言ひ終ると、糠助はスタスタと立去つてしまひました。
 番作と信乃は立すくんだまゝ、暫し言葉もありませんでしたが、やがて何方から
 走り寄るともなく犇と抱き合ふのでした。信乃の顔には熱湯のやうな涙が降り注
 がれました。

——が、神様には孝子の至誠が通じなかつたと見え、母の病は次第に悪くなつ
 て遂に應仁二年十月の終り頃、四十二歳を一期として眠るが如くに逝いてしまひ
 ました。

三、不思議な玉

それから三年たちました。——
 その頃、墓六の家では一匹の猫を飼つてゐました。名を紀二郎と言ひました。
 飼主の仲がよくないやうに、番作の犬の與四郎とこの紀二郎とは逆も犬猿もたゞ
 ならぬ仲なのでした。そして、或る日のこと、與四郎は遂々紀二郎を咬み殺して
 しまひました。
 さあ墓六夫婦は怒りました。そしていつか仇を討つてやらうと折を窺つてゐる
 のでしたと或る日、與四郎はうつかり墓六の庭へ這入り込みましたが、間もなく
 血みごろになつて悲鳴を擧げて逃げ歸つて來ました。
 そのことに就いて墓六は人々に斯う言ひふらしました。





「實は今日、鎌倉管領から御書附を頂いたので恭々しくこれを拜見しようとしたところ、かの與四郎奴が踏み込んで来て、その御書附を踏みにじつた。依つて槍で疵を負はしてやつたが、御書附を破るとは無禮も甚しい、氣の毒だが飼主は打首を免れられまい。——然し、番作が大事に藏つてゐるかの名刀、村雨丸を管領さまに奉ればこの大罪はお許しになるかも知れない。」

暗に名刀村雨丸を寄越せと言はんばかりなのでした。番作はその頃、病氣で床に就いてをりましたが、それを耳にすると、早速息子の信乃を枕もとへ呼んで言ひました。

「これ信乃、お前も聞いたらう。墓六と龜篠は、御書附とか何とか言つて、日頃から欲しと思つてゐた村雨の寶刀を手に入れようとしてゐるのぢや。これを渡してなるものか、これは俺の父が持氏殿からお預りして、春王安王のお二方をお守りした紀念の品ぢや。信乃、これはお前に預けておく。早く成人して成氏殿



(持氏の子、春王安王の弟)に奉つて父や祖父の忠義な心を傳へてくれ。」
語り終つて番作は傍らの硯箱の中から小刀を取つて、天井につるした大竹の筒を目がけてサツと投げつけました。見事に繩は切れて竹筒はドシンと下へ落ちました。やがて、中から取出されたのは、錦の袋におさめられた村雨丸の寶刀なのでした。

番作は恭々しく押頂いてから、ギラリと許り抜き放ちました。

「見よ、この露もしたらんばかりの切尖を……、恰も村雨が梢を拂ふにも似て居るではないか！ これをお前に譲るから今から女姿を改めて、犬塚信乃成孝と名乗るがよい。あの龜篠も心柄の良い女ではあるが、俺が死んだとなれば人の口を恐れてお前を引取るであらう。さうなつたらお前は暫く彼處で世話になるがよい。そして、大きくなつてから成氏殿に刀を奉つてくれ。さあ、俺もうちこれまでだ。二君に仕へぬ番作の、死出の旅路に、この寶刀を借り申さう。」



言ひも終らず、番作は諸肌押脱いで、呀つと言ふ間もあらず、腹掻き切つてしまひました。信乃は思はず父の骸に取絶つて號泣しましたが、やがて、心を決めました。

「あゝ残念だ、もう少し成長くなつてゐればこんな目に合ひはしなかつたらうに――父上の御遺言には露そむく心はないが、あの伯母夫婦の世話になると言ふことはどうしても心が進まぬ。まして、この寶刀でも奪ひ取られでもしたら……ああ、さうだ、死んでしまはう。戰場では父子枕を丸べて討死をすることもあるのだ。」

信乃は村雨丸を押頂いて鞘を拂ひました。その時、縁の下で與四郎がウーッと苦しげに唸りました。信乃ははつと氣がついて、

「あゝさうだ。與四郎が可哀さうだ。どうせ死ぬものなら、傷手に泣き苦しみますよりか、いつそわが手にかけて殺してやらう。」と言つて庭へとび下りました。



バサリ！ 白刃一閃！ 與四郎の首は脆くも落ちました。と不思議、迸る血潮と共に何やら白いものがきらめき出ました。手に取つて見ればそら豆の倍もあるほどの一つの白珠、紐通しの穴のあるところを見ると正しく珠數の玉らしいのです。しかも、透かして見れば「孝」といふ文字が見えます。

「ほう、わが名にゆかりのある「孝」の文字とは不思議なことだ。だが、今となつてはこんなものには用はない。捨てしまへ！」

信乃はいきなりその玉を石の上へ投げつけました。と玉はポンとはづんで信乃の懐ろへとび込んだのでした。これはと思つて又投げつけると、又はねつかへるまた投げつけると、又とびかへるのです。

全で玉には魂があるやうなのでした。いくら投げてもきりがないので、信乃はそのまゝ父の屍の傍へドカリと座ると、兩肌おし脱ぐつて刀に手をかけましたがふと見ると、左の腕にはいつのまにか牡丹の花の形をした痣が出来てゐるのでし



た。先刻、玉がはねかへつた時に出来たものと見えます。

『南無阿彌陀佛々々々々々々……』

信乃は村雨丸を抜き放つて、凝然と切尖に見入り乍ら、今しも念佛を唱へて横腹へ突き立てようと思いました。と、突如、その時、

『信乃、早まるな、待て〜！』と聲をかけて、庭樹の蔭から二つの黒い影が走り出しました。

四、同じ痣、同じ玉

二つの影と言ふのは他でもない墓六と龜篠なのでした。危いところを二人に助けられた信乃は、それからといふもの伯母の家で世話になることとなりました。

ところが墓六の家の召使ひの中に額藏と呼ばれる十三歳になる少年がをりました。この少年は不幸な信乃に同情をしている〜と慰めてくれますので、二人は





いつかすつかり仲良しになつてしまひました。
或る夏のことでした。信乃が庭先で行水を使つてゐると、額藏がふと通りすがつて『オヤ、あなたにも痣がありますね、私と同じ形です。』と言ふのでした。そして、肩を脱いで見せました。成程、背中から右の肩にかけて同じやうな痣があるのです。

『私は生れた時からあつたさうですよ。』

と額藏は言ひました。

間もなく行水が濟んで着物を着ようとする時、信乃の袂から、ころ／＼と玉がころげ出しました。額藏は素早くそれに眼をつける。『おや、あなたも玉を持つてゐますね。』私も持つてゐますよ。』と言つて、懐ろから護身袋を取り出しました。中からは色も形も同じの玉が現はれました。たゞ中の文字が「義」と書いてある。丈の相違がありました。

二人はあまりの不思議さに打驚きました。が、同じ玉を持ち、同じ痣のあるからには、他人のやうな気がいたしませんでした。そしてお互ひに心の中を打明け合ひました。信乃が今までの身の上をつぶさに物語る時、額藏は涙をたへて聞き入りました。額藏もまた自分の生ひ立ちを物語るのです。

——額藏は、伊豆の國、北條の豪家、犬川衛二則任といふ人の一人息子として生れ、幼名を莊之助と言ひました。莊之助が生れた時下男が胞衣を埋めやうとして庭を掘ると、土の中からぴか／＼と光るものが出ました。それが「義」の字の這入つてゐる珠數の玉なのでした。莊之助は何不自由なく七歳の年まで暮しましたが。その年になつて、父の則任が合戦に出て討死を遂げてしまひました。そして、家屋敷も家傳の名刀の小篠落葉も皆人手に渡つてしまひました。で、母親は息子の莊之助の手を曳いて、安房の國にゐる親戚の蛭崎十郎輝武を頼つて旅に出ました。が、何しろ亂世のことゝて、親一人子一人の道中は一方ならぬ難澁であ





りました。そして、恰度來かゝつな大塚の墓六の家の門前で、母は急病に罹つて
 哀れそのまゝ息絶へてしまひました。莊之助はどんなに嘆き悲んだことか知れま
 せん。墓六はその莊之助を引取つて召使ひとし、名を額藏とかへました。それか
 ら、六年の間といふもの、額藏は蔭日向なく忠實に働いてきたのでした。……
 『僕だつて男だ。きつと犬川の家を立て直して見せる！』
 額藏は強い決心の色を眉宇に漂はして最後にきつぱりとさう言ふのでした。
 そして、二人は兄弟となつて助け合ふことを誓ひました。額藏は七ヶ月先に生
 れましたので兄といふことになり、名も犬川莊助義任と改めました。言ふまでも
 なく、このことは墓六夫婦達には内證にしてありました。

五、糠助の頼み

信乃と額藏とは人眼のないところでは兄弟の様に仲良く致しましたが、伯母夫



婦の前などではわざと喧嘩をしたりして二人の素性を氣づかれないやうにしまし
 た、墓六と龜條はそれを眞に受けて額藏にいろ／＼と信乃を苛める手段などを入
 智恵するのですが、額藏はそれをみんなこつそりと信乃に知らせました。人を
 陥入れやうとすれば、却つて人に陥入れられてしまうものです。悪いことは出來
 ません。

こんな譯で信乃は額藏の他には決して心を許しませんでしたが、今一人百姓の
 糠助の親切に對しては心から感謝してゐるのでした。その糠助がこの四五日顔を
 見せない。もしや病氣でも患つてゐるのではないかと思つて見舞に行つて見ると
 果して床に臥つてゐるのでした。糠助は嬉しげに顔を上げると、喘ぎ喘ぎたつた
 一つお頼みし度いことがあると言ふのでした。

糠助は安房の國の生れでしたが、諸々方々をさまよつてゐるうち、長祿三
 年十月一人の男の子が生れたのでした。が、不幸にも妻はお産すると間もなく亡



くなつてしまひました。糠助は赤ん坊の立吉を抱いて途方に暮れましたが、やがて悲しい覺悟を決め、赤ん坊諸共川へ身投げをしようと思ひました。ところが一人の武士が通りかゝつて、糠助を引止め、いろ／＼事情を聞いた上哀れに思ひ、赤ん坊を貰ひ受けて立去りました。――糠助は今となつてその立吉のことが氣になつてならないのでした。

『そのお武士の名前を聞くのも忘れ、たゞ成氏様の家來だといふことしか分つてゐねえだもし、お前さんが古河（成氏の領内）へでもおいでたら、この爺のことを立吉に話しておくんさい。立吉は生れ乍らに右の頬に牡丹の形の痣があり、又、あれが生れた時に、祝ひのために鯛を釣つて來て料理してゐると、腹の中から、白いびか／＼した玉が出た。玉の中には「信」といふ字があつた。それもちやんとお護身袋に入れておいた。坊ちやん、立吉にめぐりあつたら、どうぞよろしく言つておくんさい。』それが糠助の最後の言葉となつてしまひました。

信乃が打領くと老人は和やかな顔付で眼を閉じました。

信乃は涙を拭つて顔をあげました。

『自分と同じ痣！……同じ玉だつて……？ お、では未だ兄弟がゐたのか！』やがて、愕いたやうに思はず泣きました。と、まだ見ぬ兄弟に對するなつかしさ、忽ち潮のやうに熱く胸いつばいに溢れるのでした。

五、火遁の名人犬山道節

一、龜篠の悪計

一方、悪人の墓六夫婦に育てられた娘の濱路は、親にも似ず至つて氣だての優しい少女となりました。この頃では女一通りのたしなみも辨へて、花を欺くほどの美しい姿となりましたので、近所での評判娘となり、嫁に貰ひたいといふ話は





降るほごにありました。その中でも網乾左母二郎といふ浪人は殊の他熱心に望んでをりました。又、この土地の陣代籤上宮六といふ者もせひ濱路を貰ひ受けたいと申込んでをりました。

抜目のない墓六夫婦は、どうかして濱路を宮六の許へ嫁入りさせたいと思ひました。それが信乃を自分の家へ引取る時に、末々信乃と濱路とは一緒にさせると言ふことを、村の人々にも堅く約束し、信乃の家や田畑までもみんな自分の物としてしまつたのでした。ですから、今更その約束に背くといふ譯にはまゐりません。そこで、墓六夫婦はこつそりと相談をして、信乃を殺してしまはうと言ふ、恐ろしい謀事を企んだのでした。

翌日になると、龜篠は網乾左母二郎の家へ出かけてゆきました。

「お、お母さん、いづぞやお願ひいたしたお話はどうなりました？」左母二郎は龜篠の顔を見るなり、さう言ひました。

「はい、その話で上つたのぢや、お前さんはほんとに果報者ぢや。」

「え、つ、では、御承知か……」

「はい、家の人は、お前さんを濱路の婿にして大塚の家を譲りたいと仰言るのぢや。だが邪魔になるのはあの信乃ぢや。あの信乃が生きてゐるうちはどうも難かしい。そこでお前さんに一つ相談があるのぢやが……」

と言つて龜篠は急に聲をひそめると、左母二郎の耳許に口を寄せて、何事かをヒソ／＼と囁きました。左母二郎はニタリと打笑ひ乍ら合點きました。さて、どんな陰謀が成立つたことでせうか？

二、神谷川の漁

その日の夕方、信乃は墓六夫婦の部屋へ呼ばれました。

「どうぢや信乃、お前の持つて居る村雨の寶刀を古河殿に奉つたらどうぢや。さ





うすればお前は殿に召抱へて頂くことが出来よう。その上は濱路を遣はして更めて婿の披露をしてもよいから、明日にも古河へ立つたがよからう。』

と、墓六は言ふのでした。言葉付は如何にも親切らしいのですが、その裏には何か企みがあるらしいと言ふことを信乃は逸早く心に感付きました。しかし信乃はもと／＼村雨丸を父の遺言通り殿様へ奉る積りでゐましたから、素直にその言葉に従ふことにしました。墓六夫婦は先／＼思ふ壺にはまつたわいと言はん許りの顔付で走り舌をべロリと出しました。

やがて、墓六は信乃の出立のお祝ひに、魚を取りにゆくのだと言つて、左母二郎と信乃を連れて一緒に神谷川へ出かけました。

河邊には土太郎といふ漁師が船を用意をして待つてゐましたので、四人は直ちに船へ乗込んで流れの中程へ漕ぎ出しました。

網をおろすたびに獲物が澤山ありました。一同大喜びで眺めてゐるうちに、ど



うしたはずみにか、網を打つてゐる墓六が不圖足を踏み外して、河の中へザブンと落ち込んでしまひました。信乃はびつくりして手早く着物を脱ぎ棄て、川へ飛び込みました。つゞいて土太郎も跳り込みました。

信乃が墓六を助けようとして泳ぎ寄つてゆくと、これは不思議……墓六と土太郎は矢庭に信乃の手足を取つて沈めようとするのでした。さてはと感付いた、信乃は、素早く墓六を小脇に引抱へて岸の方へと泳ぎました。

こつちは舟の中に残つた左母二郎、舟の上に置いてあつた信乃の太刀を取上げて、中身だけ抜き取つて墓六のと取換へようと思ひましたが、あまりに立派な太刀なので、ムラ／＼と慾が湧き、信乃の太刀の中身を自分の鞘へ入れ、自分のを墓六のに入れ、墓六のを信乃のへ入れかへて、そ知らぬ顔をして居りました。

やがて、三人の者が舟へ戻つたので立歸ることゝなりました。墓六は折角の計畫が水の泡となつたので、心中ざれほど口惜しがつたことか知れませんが、左母二



郎はまんまとしてやつたりと思つて居ります。

その翌朝となると、信乃は八年間も世話になつた墓六夫婦の家を出て、旅立つこととなりました。見送りの者は額藏たゞ一人でした。

額藏は墓六夫婦から、途中で信乃を殺してくるやうにと頼まれたといふことを打明けました。そして、盡きぬ名残りを語り合ひ乍ら歩いて、その夜は栗橋の宿に泊り、あくる朝二人は西と東に袂を別ちました。

三、濱路さらはる

濱路は信乃が旅立つてからといふもの遂々病氣になつてしまひました。

一方、陣代の簸上宮六からは毎日々々矢のやうな催足がまゐりますので、墓六夫婦は娘の枕邊に詰めきつて、言葉巧みに、宥めすかし、嚇し、或は偽つて、遂に厭がる濱路に宮六との婚禮を承知させてしまひました。

そして、夫婦の者は吻と一安心しました。信乃はもう額藏に殺されてしまつたらうし、萬一斬りそこなつたとしても贋の寶刀を殿様に奉れば打首は必定と高を括つてをりました。

いよ／＼婚禮の當日となると、何しろ庄屋の娘が陣代様へ嫁入りするといふので、村中は引繰返るやうな大騒ぎです。

しかし、濱路は否應なしに承知させられたといふものの、素々宮六の許へ嫁入らうなどといふ心は微塵もありませんでしたので、生きた心地もせずすゝり泣いてをりました。

やがて、日も暮れ、榮あるべき婚禮の時刻は刻々と近づいてまゐりました。

濱路はもうヂツとしてゐられなくつて、思はず立上ると、便りない足ざりて庭へ降りました。そして、深い夜空に瞬いてゐる星の群を見上げてホツと吐息をつきました。





今となつては逃げもかくれも出来ない。たゞ執るべき途は死あるばかりだ。
——さう思ふと濱路は一刻の裕餘もせず、細帯をといてさつと松の枝に投げかけました。

『なむあみだぶつ〜……』

濱路がアワヤ細帯へ手をかけようとしたそのところへ、バタ〜と足音がして何やら黒い影が走り寄りました。濱路が愕いて振向かうとして瞬間には既に後から抱へ上げられ、アツと言の間もなく口を塞がれてゐました。かくて黒い影は濱路を小脇に引抱へると何處ともなく立去つてしまひました。

その黒い影は一體何者なのでせうか？

それは他でもありません。浪人の網乾左母二郎なのでした。

左母二郎は氣を失つた濱路を豫ねて待たしてあつた、井太郎、加太郎といふ二人の駕籠昇の駕籠へ乗せると、ひたすら夜道を急がせて、やがて本郷圓塚山の邊

へ差蒐りました。

すると、駕籠昇は何と思つたかピタリと立止つて、ガラリと打つて變つた様子で、

『おい、お武士、この夜道にかう急がせられちややり切れねえ、少し酒代を奮發しておくんなせえ。』

と、言つて酒代を強請りました。が、左母二郎とて武士のこと故それしきのことには驚きません。

『ふん、酒代か、さあ之をやるから受取れ。』と、言ふが早いか、いきなりギラリと村雨丸を抜き放つて、右に左へと斬り拂ひ、遂に瞬く間に二人の者を斬り殺してしまひました。

『ふん、さすがは天晴れな斬れ味！』

さう嘯いて血刀を拭はうとしたその時、いきなり背後から組付いて來た何者か





とありました。

『やい左母二郎、俺の兄弟分をよくもやつつけやあがつた。覚えてるやがれ!』ヒラリと振放して見れば、それは漁師の土太郎なのでした。土太郎は抜く手も見せず一刀振かざして飛びかゝつて來ました。

二人は暫らく鎗を削つて斬り合ひましたが遂に左母二郎は手傷を受け、次第々々にたぢろぎました。それと見て土太郎は必死の勢ひで迫ります。敵はぬと思つてか、やがて左母二郎はバラ／＼と逃げ出しましたが、逃げる途中で小石を拾つて、發止とばかり土太郎目がけて投げつけました。狙ひは過たず土太郎の額に中つたから堪りません。アツと言つてドタリと倒れる。そこへ逸早く駆寄つて左母二郎は難なくとゞめを刺してしまひました。

四、救ひの手裡劍

左母二郎はホツと一息。

やがて、駕籠の中から氣を失つてゐる濱路を引出していろ／＼と介抱いたしました。

『これ、濱路どの、おゝ、お氣付きになつたか。いや、危いところぢやつた。もう安心を召され、この上は、親も承知のこと故、天下晴れての夫と妻ぢや、いづれへか參つて仕官を致さう。これ、この刀を見られよ、これは源氏に傳はる村雨丸ぢや、これさへ京都へ奉れば重い役人に引立てられるのは必定ぢや。……なにこの刀か、これは一昨日神谷川へ漁に參つた時、密と信乃のとすり替へて置いたのぢや。はつは、慕六親爺奴まんまと喰はされたとは氣がつくまいあつは、』

——聞くより濱路は聲も立てんばかりに打愕きました。

おゝ、では信乃は、自分の刀を村雨丸だとばかり思つて、それを古河殿へ奉り





に行つたのか。その刀が似ても似付かぬ鈍刀だつたらごんなお叱りを蒙ることだらう。あゝ、大變なことになつた！ さう思ふと濱路はカツとして、矢庭に、左母二郎の持つてゐた村雨丸を引奪ると、力任せに斬りつけました。

『えゝつ、何をしやあがる！』

左母二郎は吃驚して素早く身を躲すと、ギラリと小刀を抜いて斬りかけましたが、何と言つても濱路は繊弱い女の身、大の男を相手にしては敵ふ筈がありません。遂に乳の下を斬りつけられて倒れてしまひました。

『己れ、憎くい奴めが！』

左母二郎は濱路の傍へ走り寄ると、留めを剃さうとして白刃を閃めかしました。

ヒューツ！ その時、何處よりか風を切つて飛んで來た一本の手裡劍、グサリとばかり左母二郎の胸元に突き刺さりました。『アツ』と言つて左母二郎はそのま



ゝ打倒れてしまひました。——同時に忽然として悠々立現はれた一人の人影！

年はやうやく二十ばかり、筋骨逞しく、眉目秀麗な若者で、肌には鐵鎖繻絆を着込み、唐織の廣袖の單衣をまとひ、腰には朱鞘の大刀を横たへてをります。

彼は一亘り四邊を見廻しましたが、ふと左母二郎が手に握つてゐる寶刀に眼をつけるとツカ／＼と進み寄つて、取上げ、切尖から鍰元まで瞬きもせず見詰めるのでした。

『おゝ、これは音に聞く村雨の名劍ぢや！ ふうむ、これが手に這入つたからには、見事わが響を討果たさいで措く可きか。あゝ、有難や／＼。』と言つて、若者は寶刀を押頂くのでした。

この若者は一體何人なのでせうか？

五、玉の取替子



一方、額藏は信乃と別れてから只管道を急いで歸りましたが、途中でトツブリ日が暮れてしまつたものですから、いつか道に踏み迷つてしまひました。これは不可んと、道を取直して圓塚山のほとりから大塚の方へ出ようとして來かゝるとふと行手に當つて何やら黒い影が見えます。ハテナと思つて木立の間から透かして見ると、一人の曲者が白刃を手にして突立ち、足許には若い女が血に染んで打倒れてゐるのでした。

なほも様子を窺つてゐると、やがて曲者は刀を鞘に納め、倒れてゐる女を引き起し、『濱路々々！』と呼び立てました。

『うゝむ。』一聲呻いたかと思ふと女はごうやら正氣に返つた様子です。

『これ、しつかりせい濱路、わしはお前にとつては異母の兄、犬山道節忠與ぢや安心せい、傷は浅いぞ！』

聞いてゐた額藏は思はず愕いて眼を睜つたのでした。

この邊で一寸犬山道節の身の上に就いて語らせて貰ひませう。

道節の父は犬山貞與入道道策と言つて、煉馬平左衛門尉倍盛の家臣だつたのですが、先年の池袋の戦ひで、扇谷定正の爲めに散々に討敗られ、一家は悉く討死を遂げてしまつたのでした。不思議にもたつた一人生き残つた道節は亡君の恨、父の仇を晴らさんものと種々心を碎きました。先立つものは軍用金と氣付き、先づごうかして金を集めなくてはならぬと思ひました。ところが、道節の家には昔から火遁の術といふ忍術の秘法が傳はつてをります。そこで、道節は山伏姿に身をやつし、諸國を廻つて歩き乍ら、その火遁の術を使つて見せては人々から錢を貰ひました。

今宵も道節はこの山の麓で村の人たちを集め、火の中へ飛込んで姿を消して見せたりして金を貰つてゐましたが、ふと、こんなこととして人を欺しては金を貰つてゐるといふことが馬鹿々々しくなりました。





「あゝ、もう止めてしまふ、地下のお父さんだつて、俺がこんな乞食見たいな真似をしてゐるのを見られや喜ばれはしまひ」さう思つて、圓塚山をトボくと越へようとするど行手に何やら黒い影がうごめいてゐるのでした。耳を澄ますと、『墓六』とか『濱路』とか『大塚』とかいふ話し聲がとぎれとぎれに聞へます。さては、あの少女が自分の腹違ひの妹で、大塚にやつてあつた濱路といふのならうと氣が付きました。が、既にその時、女は男に斬りつけられて打倒れたところでした。道節は突嗟の場合、手練の手裡劍をいきなり打つて妹の急を救ふことが出来たのでした。

— 苦しい息の下から一伍一什を物語つた濱路は喘ぎく首を擡げて更に續けました。

「兄さま、こんな譯でございますから、この村雨丸は、古河へ持つて行つて、ご



うぞ、信乃殿にお渡しなすつて下さいまし。こればかりが氣になつてなりませぬ」道節は暫らく黙然としてゐましたが、やがて首を横に振りました。

「臨終の際の汝の願ひ、聞いてやらねばならぬのぢやが、暫らく待つてくれ。仇を討たねばならぬこの俺の手に、村雨丸が入つたのは何よりぢや。見事俺が仇を取つた上は必ず信乃とやらに返して遣はす。これ妹、それまでどうか待つてくれ」

聞くより濱路は悲しさに胸が塞がつてワツと泣き崩れましたが、哀れや、遂々その儘息がたえてしまひました。

道節もその有様を眺めて胸の裡で男泣きに泣かずにはゐられませんでした。

「忠を立て考を全うせんとすれば、斯くも苦しいものか！」慨然として道節は天を仰いで泣くと涙を振拂つて悄然と立去りかけました。

その時、木影からヒラリと跳り出した黒い人影、それは言はずと知れた額藏で



した。

『待て！』と言ふより早くムンズと道節のうしろから組付きました『何を
か！』道節もさる者、ガラリと對手を外すと四つに組んで龍虎相搏つが如き凄ま
じい格闘を演じはじめました。組み合つてゐる内に額藏の腰に下げてあつた薄身
袋の緒が切れてそのまゝ道節の手に取られてしまひました。額藏はそれを取戻さ
うとして刀を抜いて斬り掛りました。丁々發止、茲に於て兩人は火花を散らして
斬結びました。やがてのこと隙を窺つて額藏が勢ひ込んで斬込んだ切尖道節の肩
先の瘤へ強か斬りつけてバツと血が迸りつゞいて何やら丸い物が飛び出しまし
た。額藏は素早く手に受け止めるとなほも刃を揮つて迫りました。

『エ、ツ、猪小才な、俺は大望のある身ぢやこゝで死を争ふてはゐられぬ。そこ
退け！』

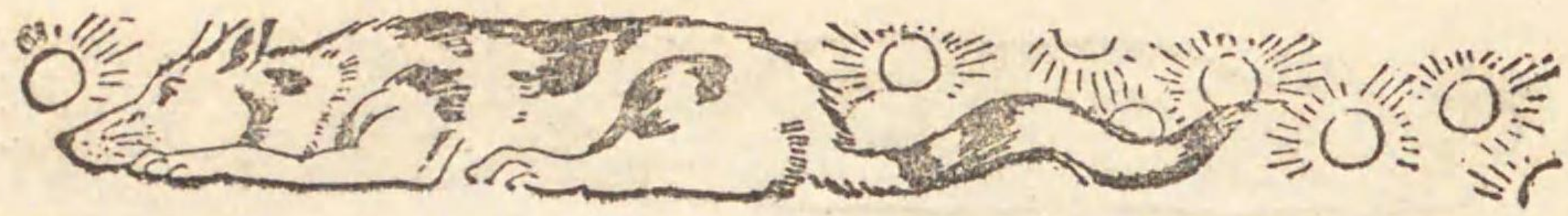
道節は焦つて聲を立てました。

『さては、俺の手練に恐れをなしたか、命が惜しくばその寶刀を置いて行け』
『何で渡してなるものか、えつ面倒だつ』言ふより早くバツと立昇る烟の中へ飛
込んで掻き消す如く道節の姿は失せてしまひました。『己れ、火遁の術をもつて逃
去りしか。え、つ残念！』額藏は齒咬して口惜がりました。

その時、ふと、先刻道節の瘤を斬つた時飛出したものは何だらうと思つて、手
を抜いてよく見れば、お、それは額藏の秘藏の玉と少しも異らぬ玉で、しかも
その玉には「忠」といふ字が書いてあるのでした。額藏は「義」といふ字の書い
てある玉の這入つてゐた護身袋を對手に取られてしまつたから、結局取換つてを
したやうなものでした。

六、墓六龜篠の最期

話代つて墓六の家では、花嫁の濱路の姿が見えなくなつたといふので、引繰返





るやうな大騒ぎです。その間に刻々と時間は経つて、やがて、當の花智たる陣代
簸上宮六が悠々と乗込んで参りました。墓六夫婦は大いに狼狽へしましたが、そ
のうちに誰か濱路を探して連れ戻つてくるだらう、と言ふことを頼みにして、
ともあれ御馳走を整へて宮六をもてなすことにしました。

が、とかく慌てゝゐる時には碌なことはありません。——龜篠が鼻の頭へ銅炭
をつけて挨拶に出たのを先づ第一の失敗とし、次ぎに出した鯨の味噌汁の中には
豈圖らんや腐つた東蓼子が浮かんでゐる、更にすゝめた自慢の銘酒は、思ひがけな
くも酢であつたりして、イヤハヤ、散々の不首尾。

簸上宮六はスツカリ氣色を害なつてしまひ『えゝもう御馳走も何も要らん、早
く花嫁を出せ!』と、怒鳴りつけました。

墓六は思はずブル〜と顫へ上り

『はつ〜、實は、その一寸急病でして……』

と、ごまかさうとしました。

『何、急病、然らばお見舞申さう。何處に寝てゐる?』

宮六はいきなり突立上りました。墓六夫婦はいよゝゝ狼狽へ、その上包み隠す
ことも出来ず、恐るゝ娘の家出した次第を物語りました。聞いて宮六は益々腹
を立てました。

『えゝ汝等、どこまで人を馬鹿にしてゐやあがる。東蓼子を喰はせたり、酢を飲
ませたりなほその上花嫁をこつそり逃がせて、どこまで俺を弄る氣だな。ヨシ、
覺えてゐろ!』

そして、矢庭に刀の柄に手をかけました。墓六夫婦は吃驚仰天、暫らく口も利
けずオロ〜としてゐましたが、ふと思ひ付いて傍らの刀架にあつた刀を外すと
双手に捧げて宮六の前へ進みました。

『もし、御陣代様、これは源氏に傳はる稀代の名刀村雨丸でございます。これを





聲殿への引出物として差上げておきますから、一先づお怒りをお鎮め下さいまし

し』
宮六がチラリと眼をやると成程見るから立派な太刀、元より慾に目のない宮六のことでしたから急にニコやかな顔付となつて手に取上げました。やがて、ヒラリと抜き放せば、水も滴るばかりの秋水とは思ひの外、一眼見てさへ分る鈍ら刀! 『えい』と言つて投げつければ、忽ちへチャクチャにへシ曲つてしまつたのでした。

『こら墓六、重ねくの無禮、思ひ知れ』

赫と火の如く憤つた宮六、抜く手も見せず浴びせかけた稻妻の刃墓六は一堪りもなく血煙あげて打倒れました。それと見た媒酌役の軍木五倍二も力を合はせて龜篠を絡め捕へ、二人して酷たらしくもなぶり殺しにしてしまひました。

——とこころへ折柄、丁度戻つて來たのが額藏でありました。ふと、門口に佇ん

で見ると、何やら家の中からたどならぬ氣配……。ハテナと思つて入りかけようとする、血刀拭ひ乍ら立出でようとする宮六五倍二の兩人にバツタリ出會ひました。

呀ッと愕く兩人、こいつも行きかけの駄賃にやつつけてしまへとばかり俄然額藏目かけて左右から斬りつけました。

『主の仇、思ひ知れ!』

額藏は隙さず一刀抜き放つて、チャリンチャリンと渡り合ひ、宮六が怯みかけたとこころを『エイッ』と、唐竹割に斬り倒し、返す刃で五倍二の眉間に斬りつけました。

敵はぬと思つてか五倍二はその儘宮六を置き捨て、逃げ出しました。逃がしてなるものかと計り額藏は跡追ひかけました。丁度その時、濱路を探しに行つた人達が大勢ドヤ〜と戻つて來て、今しも額藏が血刀提けて飛出さうとするのを見





ると吃驚し、大きな丸太を擔ぎ出して來て額藏の行手をさへぎつてしまひました。

額藏は止むなく皆の者に今の出來事を詳しく物語りました。残念にも、その間に仇の五倍二の姿は見えなくなつてしまひました。

六、芳流閣上の戦ひ

一、芳流閣の屋根へ

一方、額藏と別れた犬塚信乃成孝は、數日の後無事古河の城下に辿りつき、執權、横堀史在村の邸を訪ねて、寶刀を奉るために參上した旨を言上いたしました。やがて『何れ御沙汰があらうから、それまで宿に退つて居れ』との仰せでしたので、信乃は一先づ宿へ立戻りました、いよ／＼多年の宿望が達せられると思

ふと嬉しくてなりませんでした。父番作、祖父匠作も草葉の蔭でさぞ喜んでゐることだらうと思はれました。それにしても永らくお預りした寶刀といよ／＼別れる時が來たのだから、今日は最後の埃でも拂つておくことにしよう、と信乃は寶刀を押頂きました。先づ柄糸を解き、徐かに鞘を拂ひかけましたが、一目見るより信乃は思はず呀ツと聲を立てました。それは、いつの間にかやら思ひも寄らぬ鈍刀と變じてゐるのではありませんか！

『はあて、不思議な！』

信乃は騒ぐ胸を押鎮めて深く／＼考へました。――が、この寶刀は片時たりと體から離れたことはないのですから中味の變るわけがありません。たゞ一度、これはと思はれる節は、神宮川へ魚を釣りに行つた時だけでした。

『ふむ、さてはあの時ぢやな』

やうやくのことで信乃は思ひ當りました。けれども今となつてはいくら口惜し





がつても及びません。しかも、このまゝ殿にお目通りをしたなれば、殿様を欺いたこととなります。

『あゝ、どうしたらいいか、困つたことになつてしまつた』

信乃が途方に暮れてしきりに悶えてゐる折柄、「寶刀を携へて早速登城せよ」との旨の使者がまゐりました。そこで信乃は萬事殿様にお目通りした上で一切の事情を申上げることになり、心を決め、やがて身仕度調へて登城いたしました。

さすがは古河様の城中だけに宏大壯麗、眼を奪うばかりです。正面上壇には簾を垂れて成氏が着座せられ、その下には横堀史在村初め家臣の者が大勢左右に居流れ、庭先や廊下には武装をした武士が厳めしげに堵列してゐるのでした。

信乃は先づ座に着くと慇懃に挨拶を申上げました。その時、在村が「寶刀を進め参らせよ」と聲をかけました。

信乃は思はずハツと踏らひましたが、心を決めて申上げました。





「はつ、眞に申すも恐れ多いこと乍ら、最前寶刀を調べましたるところ、いつの間に擦り換へられてか、中味がまるきり變つて居りました、思はぬ不覺にて面目次第ありませぬが私には些か心當りもござりますること故、こゝ數日のお暇を下されば、相違なく寶刀取返してお届け致します。この儀お許し下され度く偏にお願ひいたします」

聞くより在村は赫と怒りました。

「え、つ、今となつて何を白痴たことを申す、ふむ、思ふに根もなき寶刀をかたつて城中をさぐりに參つた敵方の間牒に相違あるまい。それ者共、召捕れ！」

聲に應じて彼方此方に控へてゐた武士が一齊に信乃目掛けて打つてかゝりました。

信乃は突嗟のこの場合、今こゝでオメ／＼虜になつてしまつては身の證を立てる譯にゆかない、それ許りではない寶刀を奪ひ返す者がなくなつてしまふ、と思



ひましたので出来る丈逃れること、し、寄せてくる武士共を片つ端しから手玉にとつて投げつけました。それを見て氣短かの成氏は「それ、無禮者を討取れ！」と下知しましたので、近臣はいづれも太刀抜きかざして斬り廻りました。

信乃は疊を上げて楯に取り、隙を窺つて一人の武士の手から太刀を奪ひ取る瞬間、間に八方を薙ぎ倒し、十數人を斬り伏せて、ヒラリと庭へ跳り出し、スルスルと松の木へよじ登つたかと思ふと、忽ち御殿の屋根へ飛移つてしまひました。城内の武士誰一人としてそれにつゞく者はなく、一同アレヨ／＼と言つて眺めてゐるのみでした。

信乃は屋根から屋根へと飛び移りましたが、ふと見ると、前方に三階建の高樓が聳へて居ります。それは物見臺として建てられた芳流閣なのでした。彼處へ登つたら逃れ路を見付けることが出来るかも知れないと思ひましたので、信乃は忽ち猿のやうによじのぼりました。見下ろせば眼下は洋々たる利根の流れで、城下

にはたゞ一艘の小舟がつないであるだけです。裏手の方には數百人の武士が手に手に弓を携へてワイ〜と騒いでゐます。

登つては見たものゝ信乃は逃れる路のないのを知りました。「えゝつ、かうなつたら斬つて〜斬り捲くるばかりだ!」さう呟いて信乃は刀を振廻して見せました。

成氏は庭へ出てこの有様を眺め「誰かあの信乃を討ち取るものはないか、天晴れ討取つた者には千貫文の褒美をつかはすぞ!」と觸れ出しましたが、誰一人として進み出るものがありません。

在村はその時、不圖、牢へ這入つてゐる犬飼現八のことを思ひ浮べました。現八はこの邊で竝ぶ者なき武藝の達人でしたが、在村の心を迎へることが出来ませんでしたので、罪なくして牢へ入られてゐたのでした。

『ふむ、さうだ、あの現八ならキツト信乃を討取るに違ひない』

在村はさう呟いて、直ちに家來に命じ、現八を牢から引出させました。

やがて、信乃召捕を命ぜられた現八は、嚴重に身仕度とへのへると十手を握り三間梯子をかけた上つて、ヒラリと許り芳流閣の屋根の上へ跳び上りました。血刀引提げて棟の上に突立つてゐる信乃と現八はデロリと見やつてかう互ひに身構へました。

さあ、ごんな活劇が演じられることでせうか?

二、眞逆様に河へ

廣庭では成氏公初め家臣一同堅睡をのんで打眺めてをります。

と、やがてのこと、犬飼現八信道は『御用だ、神妙にしろ』と叫びざま、十手振かざして信乃目がけて跳りかゝりました。

信乃は心得たりと許り太刀を振つて、寄せつけまいとします。這る瓦を踏みし



めて、追ひつ追はれつ、受けつ外しつ、眼にも止まらぬ立ち廻り振りは、観てる者をして、思はず掌に汗を握らせました。

しかし、何れも負けず劣らずの腕前のことゝて容易に勝敗は決しようとしませぬ。兩人は互ひに對手として不足がないこと故、いよいよ切尖鋭く、鎬を削つて闘ひ合ひます。

やがて隙をうかゞつて信乃が發止と斬りつけた一刀は現八の眉間を見事眞二つと思ひの外、ヒラリと體をかはした現八、拳を固めて信乃の刀を振拂ひました。驚く可し、太刀は鏝元からポキリと折れて飛んでしまひました。つゞいて現八は信乃のふところへとび込む。二人は忽ちムズと四つに組むと『えい』『うむ』『糞ッ』『何を！』と唸き合つて上になり下になりして揉み合ひます。その内二人の體は組付合つたまゝ轉がり出しました。それでも二人は離るればこそ！ 遂に相抱いたまゝ、數十丈の屋上より、利根川の水上めがけて眞逆様に墜落してしまひま

した。

ところが幸ひにも水中へは落ちず、岸邊にもやつてあつた小舟の中へ重なり合つてドシーンと落ちてしまひました。船はグラ〜と傾いてザブンと白い水烟を上げました。と同時にとも綱が張り切れて、船は弦を離れた矢の如く沖へはしり出し、アレヨ〜といふ間に忽ち浪間へ姿を消してしまひました。

——話は變つて下總國葛飾郡行徳の入江橋のほとりに、古那屋文五兵衛といふ小さやかな宿屋がありました。文五兵衛の妻は二年前に亡くなり、二人の遺児がありました。兄の方を小文吾と言つて今年廿才、妹は沼蘭と言つて十九歳でした。沼蘭は隣り村の船頭、山林房八郎にとついで、大八といふ四つになる男の子がありました。

すると文明十年六月二十一日、丁度牛頭天王のお祭禮の日のことでした。魚釣





の好きな文五兵衛は休みの一日を川の畔へ出て糸を垂れて楽しんでをりました。ところが、どうしたものかその日は一向釣れません。文五兵衛が退屈をし乍ら、ふと川上の方を眺めると、その時波に流され乍ら、一艘の主なき舟が流されてくるのが眼に這入りました。

やがて、舟が近づいて来たのでよく見るとお、舟の中には、二人の武士が打重つて倒れてゐるのではありませんか！

文五兵衛は吃驚仰天、時を移さずヒラリと舟の中へ飛び込みました。が、足許に倒れてゐる一人の武士の顔を見ると、思はず『お、これは現八ではないか、ご、どうした』と口走り乍ら體を揺すりました。その聲に氣がついて思はず起上つたのは犬塚信乃でした。

『ふむ、こゝは一體何處だ、おや、お前さんは誰だね？』

信乃が審し氣に文五兵衛を見詰め乍ら訊ねると、文五兵衛は呟くやうに語り出

しました。

『いや、この人を助けようと思つたら、見も知らないお前さんが氣がついたのだ。この頬の先に痣のある人は、古河の御所の走卒、犬飼現兵衛といふ人の貫ひ子、現八信道と言ふ人だ。あゝ可哀さうに、もう助らないかなあ』

言はれて初めて信乃は氣がつき、現八の顔を見やりましたが、成程牡丹の花の形をした痣があるのでした。瞬間信乃は、いづぞや糠助から臨終の際にたのまれた言葉が思ひ浮び糠助の子の立吉といふ者はこの現八ではないかと思ひました。そして、これ迄のことを残らず文五兵衛に物語り、この現八の骸をねんごろに葬つてくれるやうにと呉々も頼みました。ところが、その言葉が終るか終らないうちに死んだと許り思つてゐた現八がムクムクと動き出し『犬塚氏、一寸お待ち下さい』と聲を立てました。文五兵衛と信乃は嬉しさのあまり、思はず左右から現八に抱きつきました。





信乃は更めて糠助から聞いた、その子立吉のこと、頬に牡丹の花の形の痣のあ
ること、魚の腹の中から出た玉のこと等を物語りました。現八は一々打合點いて
聞いてゐましたがふと、肌につけてゐた護身袋の紐を解き初めました。やがて、
中から取出した一つの紙片には女文字で「長祿三年十月廿日、誕生、安房國住民
糠助子立吉」と認してありました。次ぎに取出した水晶のやうな玉には「信」と
いふ字が鮮々と現れて居りました。

『ありがたう、君のお蔭で親のことが分つてこんな嬉しいことはない』

現八は心から喜ばしさに涙さへ漧へ乍らさう言がのでした。

信乃も又首にかけた、護身袋の中から「孝」といふ字の這入つてゐる玉を取出
して言ひました。

『君、これを見たまへ。君の玉も僕の玉もそつくり同じぢやないか、たゞ字が違
つてゐるばかりだ。それから、僕にも痣がある。やつぱり牡丹の花の形をしてゐ



る。僕の親友の犬川莊助も又「義」といふ字の這入つた玉を持つてゐて、同じや
うな痣がある、ごうも不思議だ。何かわけがあるのかも知れない』
『うん、全く不思議だね。殊に依ると吾々は神さまが定めて下すつた兄弟かも知
れない』

現八はすつかり感じ入つた容子で二つの玉をマヂ〜と見比べるのでした。チ
ラリと顔を上げて思はず見會つた兩人の熱い視線は互ひの胸の奥まで射し込むか
のやうに思はれました。

三、文五兵衛と小文吾

利根河の畔で釣りをしてゐた古那屋文五兵衛は思はぬことから犬飼現八と犬塚
信乃を助けることが出来ました。二人の不思議な身の上話を首を傾げて聞いて
ゐた文五兵衛はやがて、徐ろに口を切つて、之又不思議な物語りを語り出すので



した。——
 古那屋の先祖は安房の國の武士で、文五兵衛はかの金碗八郎孝吉等と力を合はせて山下定包を討取つた那古屋七郎由武の弟として生れましたが、家が亡びてからこの行徳へ来て宿屋をはじめ、名も那古屋に因んで古那屋と稱へました。と、やがて小文吾といふ男の子が生れました。ところが不思議なことには小文吾の喰べ初めの時に、赤の御飯に箸を立てたところ、箸についてコロコロと轉がり出た玉がありました。手に取つて見ると、白く光つて水晶のようで、紐通しの穴もあり、中には『悌』といふ字が書いてあるのでした。
 小文吾は生長くなるに従つて力が強くなり、殊に相撲が大へんに上手になりました。八つになつた時の春、十五になる子供と相撲を取つて、見事相手を投げつけましたが、その時小文吾は思はず尻餅を搗いて、傍らの石へお尻を打つけました。と、そこへ大きな痣が出来て日毎に濃くなつて、今では牡丹のやうな形をし



x

x

x

x

てゐるのでした。その頃になつて小文吾は不思議な玉の『悌』の字を取つて、犬田小文吾悌順といふ武士らしい名前に改めました。尙ほ遂この頃は、八幡神社の境内で、自分の妹婿に當る市川の山林房八といふ剛の者と相撲を取つて、相手をまんまと敗かしてからといふもの、小文吾の名前は一層博く知れ渡りました——
 この物語りを聞いて信乃と現八とは大層喜んだのでした。同じ様な玉を持ち、又同じやうな痣を持つてゐるからには、互ひに兄となり弟となつて助け合つてゆかなくてはならないと思ひました。
 からして三人が話してゐるところへ水際の芦を掻き別けて、半身を現はした一人の若者がありました。それが噂の犬田小文吾だったのでした。信乃も現八も兄弟にでも會つたやうに打喜び、やがて一同連立つて古那屋を差して引上げました。

七、下總古那屋の宿

一、喧嘩の仲裁

一方、古河の城中では成氏公初め家臣一同は大へんの腹立ちで、不敵の罪人犬塚信乃を一時も早く召捕るやうにと、その人相書を八方に配り、夫々手を別けて探すこととなりました。

信乃はじめ、現八も文五兵衛も又小文吾も追付けこゝへ捕手がやつてくるだらうといふことは百も承知をしてをりました。しかし、折よくその日は祭日なので、召使ひの女達も家へ歸つて留守だし、たつた一人の客の念玉坊といふ山伏も朝から出たつきりなので、このことを知つてゐる者は他に誰一人ありませんでした。その晩は一同四人、奥の座敷で四方山の話に花を咲かせて夜を更がしま



した。

ところへ、表の雨戸をトン／＼と敲く者がありました。

『オイ一寸開けてくれ親方、俺は鹽崎の鹹四郎だ。今の先刻、神輿洗ひに行つたところ、村の若い衆達が、市川の者と喧嘩をオツバじめて、怪我人が出来たりして大騒ぎだ。親方一つ来て仲裁してくれないか』

聞いて小文吾は思はず舌打ちをしてから『相手が市川の者と言や、山林房八の弟子達だらう。相撲のことを根に持つてゐるんぢやないかしら。困つた奴等だな、ぢやとに角直ぐ行くとしよう』と返事をしてやりました。

父親の文五兵衛は心配さうな容子をして『小文吾、氣をつけて行けよ。相手が山林の者なら自分で賣つて出た喧嘩だらう。人の賣る喧嘩を買つてはならぬぞ。人はいつでも勘忍が大切だぞ』と言つて訓しました。

小文吾は打合點き乍ら、信乃と現八に挨拶して、一刀腰に打ち込んで出かけて



ゆきました。

二、殿様のお呼出し

小文吾は夜が更けても戻つて来ず、遂に次の朝となりました。

日が可成高くなつてから現八は蚊帳の中から起きて来て、心配さうに文五兵衛に密と言ひました。

『昨夜から犬塚氏は傷が痛んで苦しんでゐる様だ。若しや昨日河風に吹かれたため、破傷風にもなつたのではあるまいか？』

文五兵衛は如何にも驚いた様子で眼を睜り

『さうですかい！ 破傷風にもなつたら大變ぢや。このあたりに醫者はあるけれど、御詮儀きびしい尋ね人を、この土地の醫者に見せる譯にもゆかないし……』



と、呟いて途方に暮れました。

その時、現八はふと芝浦の薬屋で破傷風に大へんよく利く薬を賣つてゐるとか言ふことを思ひ出し、とに角これから芝浦まで一走り行つて来よう、僅か五里の道だから夕方までには歸つて来られるだらうから……と文五兵衛に相談を持ちかけました。けれども現八も又傷を受けゐることですし、留守の間の信乃の事も心配になるので、そのことを文五兵衛が氣遣ひますと

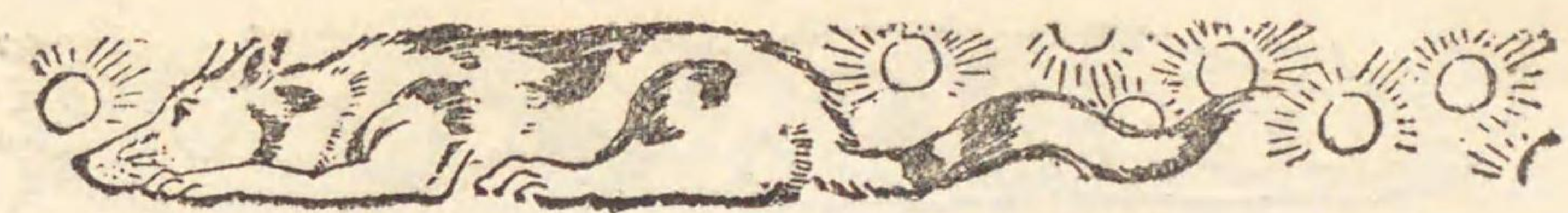
『なに、皆な友達の爲めだそれにこんな元氣なんだから大丈夫だ』と言つて、現八は早くも身仕度に取り掛るのでした。

やがて、顔を深く編笠でかくした一人の男が、古那屋の裏口からこそくと立出でました。

——やがてのこと、信乃は眼を覺ましました。

昨夜はそれ程でもなかつたのが、今朝になつて信乃は頭さへ上げられないので





した。その内に蒸々と暑くなつてはくるし、傷は痛む一方なのでした。信乃は臥つてゐ乍らも、枕邊へ来て扇で煽つてくれたり、何呉となく勞つてくれる文五兵衛を見るにつけ、又、傷と疲れも厭ひなくこの暑さの中を芝浦まで行つてくれた現八のことを思ふにつけ、有難さで心が一ぱいになるのでした。庭の柿の木では油を煎るやうにヂーヂーと蟬が鳴いてをります。その時、汗を拭ひ乍ら一人の男がやつてきて門口へ佇みました。『もし古那屋の旦那、お殿様から今すぐ来いと言はれるよ、わしと一緒にすぐ来ておくれ』

聞くより文五兵衛の胸は波立ちました。お殿様の屋敷へ行くといふことは別に恐ろしいことではないが、もしや、この奥にかくまつてゐるお尋ね者の信乃のことが分りでもしたのではあるまいか？ 或ひは又、小文吾の身の上にも何か變つたことでも起つたのではなからうか？ 又は現八が途中で捕はれでもしたので



はあるまいか？ 心は千々に亂れましたが、とに角行かずにすますといふ譯には行かないので、オド〜として立上りました。そして奥座敷へ這入ると、信乃にはそれとなく言葉を残し、兩戸を二三枚立てかけて誰もゐないやうに見せかけ、男の跡に尾いてゆきました。

西の空には入道雲がムク〜と湧き上つてをります。

三、縛られた父

ところで昨夜出て行つたきりの小文吾はあれからどうしたことでせうか？ 小文吾は喧嘩の場所へ駆付け付けて色々仲裁に骨を折つたのでしたが、その効もなく喧嘩は夜徹し續けられました。のみならず、相手の山林は頻りに喧嘩を賣つて出るのでした。しかし、小文吾は家を出る時の父親の忠告を忘れず何事も勘忍しつゞけました。遂に小文吾は房八から撲られたり叩かれたりしました。それで



も小文吾は我慢をいたしました。

そしてとに角も、今日の晝すぎになつてどうやら喧嘩を取鎮めることが出来たので、小文吾は信乃や現八のことを心配し乍ら、急ぎ足でわが家の方へと歸りました。

傾く夕陽を浴び乍ら田圃の畦道を今しもスタ／＼と急いで通りかゝると、後ろの方から不意にバタバタと大勢の捕手の者が飛び出して、手に／＼十手を振りかざし乍ら『小文吾待て』と呼びかけました。小文吾が恟つとして思はず振返へると、おゝ、之は一體どうした事か？ 自分の父親の文五兵衛が縄で縛られて引立てられてゆくのではありませんか！

その時、捕手の中から頭らしい者がツカツカと進み出ました。

『これ小文吾とやら、われは古河殿の家中で新織帆太夫敦光といふ者だが、曲者犬塚信乃を召捕るために、態々此處までやつて來た。聞けば汝の親の文五兵衛が

怪しい旅の武士をかくまつてゐるといふので、確かに信乃であらうと召出してあれやこれやと調べたところ、文五兵衛の奴、仲々強情で實を吐かぬ。それでかうして繩にかけ、今家捜しに行かうとするところだ。汝若し、この親の繩目を解いて欲しいと思へば、その曲者を搦めとつて來るかどうぢや』

言はれて小文吾はハタと當惑しましたが、突嗟に思ひ付いて

『ハイ、仰せの程、確と承りました。けれども私は昨夜家を出たきりで、どんな者が宿に泊つてゐるか存じませぬ。これから歸りまして、若しそんな者がゐましたら、必ず生捕つて差出させよう。あまり強さうだつたならば酒を飲ませた上で寢首を搔いて持参いたしませう。明朝までお待ち下さいませ』

と、心にもないことを言つて言ひ逃れました。帆太夫はすつかりそれを眞に受けて

『成程。よいことに氣がついた。萬事は小文吾、汝に任すでしょう。若し人違ひ





であつても咎めはせぬぞ。今宵は村の出口、河の渡船場に夫々番人をつけて守つておくから、さつさと片付けてしまへ。今夜限りだぞ。夜が明けたならば有無を言はせぬぞ。よいか、早う行け』

と、念に念を押して引上げてゆきました。

文五兵衛小文吾の父子も見交す眼と眼に心を通はせ、西と東に別れました。

小文吾はとぼくとして歸りかけました。

あゝは言つたものゝ小文吾は素より信乃を渡さうなごゝは露微塵思つてはゐません。と言つてたつた一人の大切な父親を見殺しにも出来ません。親を殺すか。信乃を生すか、父も助り又友も助かるといふ方法はないものかしら？

そんなことを思ひ乍ら歩いてゐるうちにいつか我が家の前へ来ました。もう四邊は暗くなつて、家の中は寂然としてゐます。小文吾は行燈に灯を入れて奥座敷へ行きました。そこには現八の姿が見へないで、信乃が唯一人臥つて重さうな眼

を僅か許り見開いてゐるのです。

四、房八の亂入

小文吾がぼんやりと一人で物思ひに沈んでゐるところへ、泊り客の念玉坊がひよつくりと戻つて来ました。念玉坊は何處からか大きな法螺貝を貰つて来て得意さうに小文吾に見せましたが、小文吾はそれどころではありません。信乃のゐることが念玉坊に悟られなければ、いゝが……とその事許り心配しました。が、念玉坊は何も知らぬ様子で自分の居間へ引取つて、しきりに尺八を吹き鳴らし初めましたので、小文吾は吻としました。

その時、表の方に當つて二挺の駕籠がビタリと止りました。中から降り立つたのは小文吾の妹の沼蘭と、その子の太八、それから房八の母の妙真とでした。(妹の沼蘭は市川の山林房八の許へ嫁入りしてゐたのでした)





「ど、どうした？ この夜更けに？」

出て見るより早く小文吾は吃驚して尋ねました。しかし、二人の者は口も利けずたゞ悲しさうに嘸り泣くのみでした。

やがてのこと二人は涙乍らに語り出したのでした。それに依ると、山林房八は此間の相撲のことを未だに根に持つて『小文吾の妹婿だといふと義理に絡つて何も出来ぬから、きつぱりと他人になつて更めて勝負をしたい』と言つて、無理矢理に妻と子供を追歸したのでした。母の妙真も餘りの房八の仕打に愛想を盡かし、嫁と孫が可愛さうだと言つて一緒について來たのでした。

『とに角、沼蘭と大八を暫らく預つて下さい』

妙真は重ね／＼さう頼んだ上、やがて何處へやら出かけてゆきました。

小文吾はあれやこれやで胸の中は全く煮へくり返へるやうなのでした。けれども苦しい胸の中を妹に打明ける譯にもゆきません。殊に信乃のことは例へ妹とは

言へ知らしてはならないと思ひました。

その時、突然、表の雨戸を押開けて跳り込んで來た一人の男がありました。

「あゝ、お前は房八！」

小文吾は驚いて叫びました。

「おゝ小文吾！」

「どうして又この真夜中に？」

「知れたことよ。言ひたい事があるから、今夜は他人となつて來たのだ」

小文吾は豫ねて覺悟をしてゐましたから、刀を取つて引寄せました。房八も亦油断なく長脇差の柄を握りました。沼蘭は大八を抱へてオド／＼として顫へてゐるのでした。

「ヤイ小文吾、お前の様な兄貴なんか持ちたくねえので沼蘭を歸したのだ。さあ着物も返してやる。その仲にはお前の欲しいものもある筈だ。これはどうだ？」





と言ひ乍ら房八は包みの中から、血のついた一枚の麻衣を取出しました。

『え、それは？』

『ごうだ、欲しくはないか！』

言はれて小文吾は顔へ上りました。その麻衣こそは、信乃が着てゐたもので、昨日河の邊で失くしたのでした。

『では、お前はもう何も彼も……』

小文吾の顔は見る／＼眞蒼になりました。

『さうさ、悉然知つてゐるんだ。沼蘭を返したのは外でもない。大罪人をおかまう様な悪者の親類などは眞つ平だからだ。こら、分つたか腰抜けめ、そこらにかくした犬塚とやらいふ奴を引きずり出して俺に渡せ』

『いや、それは違う。罪人なんかかくまつた覺へはない』

『言ふな、この期に及んでまだ言譯をするのか。肯かなければ家捜しをする許



りだ』

言ひ乍ら房八は今にも刀を抜かん許りに身構へました。沼蘭は驚いて二人の間に立ふさがりました。

『え、退かぬか！』房八が叫びざま足蹴にした途端、爪先が強か大八の脾腹を蹴つたから堪りません。赤ん坊はその儘息が絶へてしまひました。沼蘭はワツと泣き崩れました。

房八は我が子の死んだことにも氣をかけずその儘ツカ／＼と奥へ這入らうとしました。入らしてなるものかと許り立塞がつた小文吾、二人は忽ち刀を抜き放つとチャリン／＼と斬結びました。

沼蘭はこの有様を見ると狂氣のやうになつて立ち上り、身の危険も打忘れ、二人の打ち合はす刃の中へヒラリと飛び込んで止めようと思いました。

『危い／＼！』小文吾は叱りつけましたが更に耳に入る様子もありません。その



うちに足踏み違へてバツタリと打倒れ、慌て、起き上らうとするところを、無慚や、力をこめて斬り下した房八の刃に依つて乳の下を突き立てられ、呀ッといふ間もなく沼蘭は血に染んで倒れました。

房八がこれほど驚くその隙を、得たりと許り小文吾は白刃の電光振りかざして突き捲くりました。房八はタヂ〜と退きましたが、遂に小文吾の鋭い切先を受け損ね、之又紅に染んで打倒れました。ついで小文吾が太刀振りかぶると

「待て、小文吾、暫らく待て！」

と言つて房八は左手を上げて押止めました。

小文吾は言はれる儘に刀を鞘に収めました。

傷口からは止度なく鮮血が滲ります。房八は苦しい息の下からさも満足らしく微笑んで、さて何事かを語り出さうとするのでした。

X X X

五、命の恩人

——さて、房八は小文吾の顔を見上げると、如何にも満足氣にニッコリと微笑んで、刻々に迫る息の中から、聞くも憐れな物語りをするのでした。

それは今から二日前の夕方のことでした。山林房八が唯一人利根川の岸邊を通ると、生ひ茂つた葦の間から、何やら人の話し聲が聞えるのでした。ハテナと思つて立止つて耳を敬て、見ると、一人の聲の主は確かに古那屋の文五兵衛なのでした。後の二人は信乃と現八だと言ふことが分かりました。三人が此處で互ひの不思議な身の上を語り合つたことは既に前にも述べた通りであります。房八はそれを聞いてゐるうちに、ごうかしてこの勇士達の難儀を救つてやりたいものだと思ひました。ところが、その後も勇士達の身の上には益々難儀が降り重なる一方でしたので、房八は、自分の顔が信乃に似てゐるのを幸ひ、自分の首を討取つ





て役人に差出したならば、信乃も助り、又文五兵衛も救はれると思ひましたが、このことを明ら様に小文吾に話したところで、逆も承知しては呉れまいと思ひましたので、房八に相撲にかこつけて、罪もない沼藪を離別し、わざ／＼斯うして小文吾に斬られに來たのでした。……：……：夢にも知らなかつた殊勝な房八の心根！聞いて小文吾は思はず泣かされました。

『すまなかつた。／＼。許してくれ』

そして、房八の體を搔ひ抱きましたすが、さすがの深瘡に遂に締切れてしまひました。あたりは一面の血の海と化し、先刻念玉坊が置いて行つた法螺貝まで紅に染んでゐるのでした。

暫く茫然と佇んでゐた小文吾は、やがて何思つてか思はず聲をたてました。

『おゝさうだ。若き男の血五合と若き女の血五合を取つて混ぜ、破傷風の傷口へ

掛ける時には忽ちに癒えるとの話——これは丁度幸ひだ。さうだ、犬死はさせぬぞ！』

言ふより早く小文吾は、法螺貝を取つて流れる血瀬を受けとめ、それを抱へて奥の部屋に這入らうとしました。と、思はずバツタリ何物にか躓いて打倒れました。ところが、そこには、いつの間に来たのか、信乃が一面に血潮を浴び乍ら、顔を擡げてゐるのでした。

信乃は奥座敷に臥てゐると、ふと激しい太刀音を聞きつけたので、様子を窺ひに此處まで這ひ出して來たのでした。聞けば、房八が身を殺して自分を助けようといふ話信乃は、我を忘れて走り出ようとしたものゝ、身動きもならぬ病氣のこゝと、獨りで苦しんでゐたのでした。ところへ小文吾がやつて來て躓き、頭から血を浴びせたので、病氣は忽ち全快してしまつたのでした。信乃は己が命の恩人の死骸に取絶つて熱い涙にくれました。





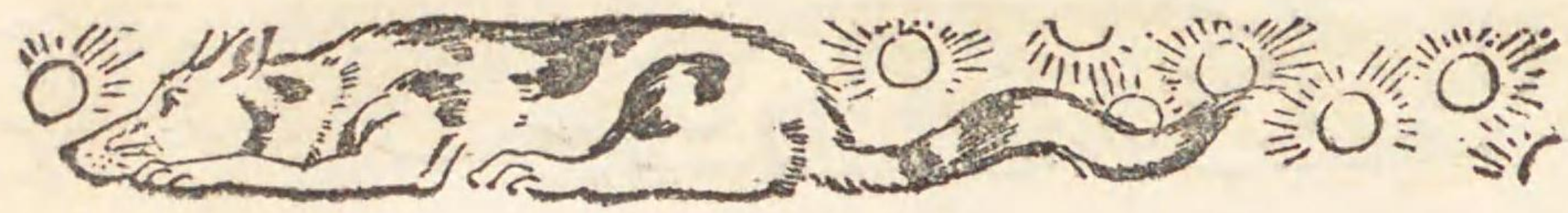
六、念玉坊實は大輔

折柄、丑滿の鐘の音がさびしく鳴り響きました。古那屋の宿はひつそりと静まり、念玉坊の吹いてゐた尺八の音もいつか止まりました。小文吾は房八の首を刎ねようとして、幾度か刃を握り上げては下しかねてをりました。——と、その時、廊下に當つてミシリと微かな足音がしました。もしや、あの念玉坊が……と思つて、小文吾と信乃は思はず振り返りました。

この場面を人に見られては折角の房八の志も水の泡となつてしまふからでした。

と同時にガラリと向ふの障子が開いて、つか／＼と這入つて來た二人の男があらりました。その一人は果して念玉坊なのでした。

『各々、暫く待たれよ。我こそは、念玉坊とは假の名、實は安房國守里見治部大



輔義實朝臣の家來、金碗大輔孝徳法師、大坊なり、これにつゞくは伏姫のお傳役を勤めた蜷崎照武の長男、蜷崎十一郎照文なるぞ、暫く／＼……』

聞いて小文吾、信乃の兩人は餘りの意外さに打驚きました。

大、照文の二人は更に言葉をつゞけて、八房の事から、伏姫のこと、役行者のことなどを審さに語り、かの散り失せた八の玉を探し、二十餘年間といふもの、諸國を歩き廻つてゐたことを物語りました。

その時、大法師は傍らに倒れてゐる大八の死骸に目を付けると

『お、丸々と太つた良い子だのに、可哀さうに……』と言つて抱き上げました。そして、何やら口の中で呪文を唱へると、不思議にも大八は息吹き返して、ワツと許り泣き出しました。ところが、不思議なことには、大八は生れてから今まで左の拳を握つたまゝで、人からも片輪とさへ言はれてゐたのでしたが、この時になつて初めて手を開いたのでした。と、その中には煌々とした白珠があつ



て、それには「仁」といふ字が書いてあるのです。又、父親の房八に蹴られた所には、牡丹の花の形をした痣が出来てゐるのです。

『われゝの兄弟が又一人ふえたぞ！』と言つて信乃と小文吾は飛び立つ許りに打喜びました。

すると、その時突然、表の方に當つて何やら唯ならぬ騒がしい物音がしまし

た。小文吾が直ちに走り出て潜り戸を開けて見れば、そこには一人の大男が頭を

割れて打倒れてゐるのでした。灯影にかざして見ると、それは鹽濱の鹹四郎なの

でした。これはと驚いてゐるそこへ右と左の小脇へ男を一人づゝ引抱へてノシノ

シとやつて来た大の男がありました。それは犬飼現八信道なのでした。

『あう、小文吾殿か、今わしが芝浦から戻つて此處まで來ると、怪しげな奴が三

人雨戸の隙間から覗き込んで立聞きをしてをつたので引捕へてやつたのだ』

現八は無造作にさう言ふと、鶏でも絞めるやうに忽ち二人の者をその場で殺し

てしまひました。

どこやらで一番鶏が鳴いてをります。

七、暴風の舵九郎

夜が明けると小文吾は、房八の首を持つて役人のもとへ届け出ました。役人は

すつかり信乃の首と信じ大へんに喜んで小文吾の手柄を賞めました。しかし、一

同いつままでこゝにゐては危いので、房八と沼蘭の死骸を舟に積んで、その明くる

朝早く市川さして引揚げました。やがて市川へ着くと、二つの骸を懸ろに人知れ

ず葬りました。その上に信乃と現八は、小文吾に送られて、大塚にゐる今一人の

兄弟、額藏の犬川莊助を訪ねてゆくことゝなりました。大八は市川にとゞまつて

祖母の妙眞が育て、未來は安房の國主に仕へさせる積りでした。大八はその後、

犬江親兵衛仁と名を改めました。





小文吾は家を出る時、信乃と現八を大塚まで送つたらすぐ歸つてくると言つて出たのでしたがどうしたものか仲々歸つて来ないのでした。もしや、何か起つたのではないかと、古那屋の宿では一同心配しておりました。そこで、大坊は、ともかく様子を見て来ると言つて、後のことを照文に頼んで、たつた一人で大塚へ出掛けてゆきました。ところが不思議なことには、その、大坊も亦鐵砲玉の様に行つたきりで、三日たつても五日たつても、歸つて来ないのでした。

『いつたい何事が起つたのだらう?』と思つて皆なの者は氣が氣ではありませんでした。

照文、文五兵衛の二人は閑さへあれば市川の親兵衛の家へ出掛けて行つて、祖母の妙真と共に、新佛の供養に餘念がありませんでした。しかし、あの恐ろしい出来事であつた晩から、早や二七日も過ぎたのに、未だに小文吾も、大も戻つて来ないのでした。



すると、この頃になつて村人の間から『どうも大江の家の様子が怪しい』と言ふ噂が立つやうになりました。

『なあ、權作どん、此頃房八の姿も、沼蘭の姿もちつとも見えねえぢやねえか?』

『うん、さうだなう。何でも近頃武士が泊り込んでゐるツてえだが、何者だらうなあ』

『さうかい。さう言やあ。あの後ろの山に妙な土饅頭が出来てるだなあ。あれも怪しいぞ』

村の人達はこんな蔭口を利きました。この噂はいつか文五兵衛や照文の耳にも入りました。どうせかうした秘密を遅かれ早かれ分つてしまふに違ひない。分つてしまつたら、この土地にゐることは出来ないのだから、今のうちに何處かへ行つてしまつた方がいゝ。そこで照文は妙真と文五兵衛の二人に、親兵衛を連れて



一先づ安房の國へ逃れるやうに勧めました。で、二人も照文の言葉に従ふこと、し、やがて四人の者は七月の或る夕まぐれ、人眼を忍んで市川の村を立出でました。四人の者は面を深く笠で隠し、落人の様に己が足音にも心を脅し乍ら路を急ぎましたが、足弱の妙真はともすれで遅れ勝ちになるのでした。村をはづれて上總の方へと路を取り、松並木まで差蒐つた頃にはトツブリと日も暮れて、千草の蔭にさびしく虫の音がすだきました。

と、その時、行手の闇に當つて、俄然大手を擴げて立塞がつた六の男がありました。頭には撚鉢巻をして腰には一口の長刀を打つ込み、毛脛も露はに、着物の裾を片端折りして見るから恐ろしげな男なのでした。

『やい待ちやあがれ。汝等の悪事は残らず知つてゐるぞ。さあ、尋常に有金置いて行けばよし、さもなけりや片つ端しから素つ首引ん抜いてくれるぞ！』それは暴風の舵九郎といふ、この近所でも名代の悪黨なのでした。





『己れ、曲者!』

照文と文五兵衛は逸早く親兵衛と妙眞を後ろに庇つて太刀を引抜きました。それと見て、あちらこちらの草叢の中から黒い影がばつたの如く躍り出て、手に手に白刃を閃めかし乍ら斬りかゝりました。チャリン／＼と斬り結ばれる音がして物凄い火花が散りました。けれども曲者共は、照文、文五兵衛の必死の奮闘には遂に敵せず片端しからズバリ／＼とやられました。舵九郎はその様子を木蔭から窺つてをりましたが、隙を見てヒラリと飛び出すと、妙眞が抱えてゐた親兵衛をいきなり奪ひ取つてしまひました。照文、文五兵衛の二人が、己れ渡してなるものかと許り駈け寄らうとすると、舵九郎は親兵衛をネチ倒した上、傍らの石を取り上げて眼より高く差上げ、アッヤー一打ちに碎かんばかり身構へました。

『さあどうだ、言ふことを肯かなけりや、この餓鬼を殺してしまうぞ!』
その一言にはさすがの二人も思はず立ちすくすすにはゐられませんでした。刀



の柄は摧けるまで握つてゐるのでしたが、近寄りたくも近寄れないのでした。と、舵九郎は快よげに打笑ひました。

『やい、手出しをして見る、この石が、この小つぼけな胸を打碎きや、たつたそれだけだぞ!』

文五兵衛は隙があつたら躍りかゝらうと身藻掻いてゐるのでした。照文は齒ざしり嚙んでブル／＼と顫へてをります。

『え、ッ、面倒だ!』

舵九郎は遂に持つたる石をドシーンと投げつけました。哀れ親兵衛は粉微塵!と思ひの外、貼ひは僅か狂つて、一寸ばかり外れて大地を強か打据えました。うろたえた舵九郎は慌て、再び石を取上げると、今度こそはと言はん許り力を籠めて握上げました。あゝ、親兵衛の命は今や風前の燈火に等しいのでした。

『えいつ!』



舵九郎は掛聲と共に石を投げ付けようと思いましたが、これは不思議！ 俄かに腕が痺れて動かなくなつてしまひました。

と同時に空の彼方から一群の黒雲が見る見る舞ひ降りて来たかと思ふと、忽ち舵八郎と親兵衛を包んだまゝ、再び空高く舞ひ上つてしまひました。一同は飽氣に取られてたゞ『あれ〜』と叫んでゐるばかりでした。暫くすると何やら空からバラ〜と降つて來ました。見ると驚くではありませんか！ それはばら〜になつて千切れた舵九郎の首や手足や胴なのでした。

けれどもどうしたものか、親兵衛はいくらたつても落ちて來ませんでした。雲はいよいよ遠く彼方へと飛んでゆくのでした。

照文はがつかりしてゐる妙真と文五兵衛を頻りに宥めました。

『何、安心したがよい。親兵衛の身は伏姫も守つて下されば、役行者もおつきしてゐる。何でむざ〜殺されるやうなことがあらう。親兵衛はきつと何處かに



生きてゐる。或ひはもう安房へでも行つてゐるかも知れない』
そして、三人はトボ〜と足を運ばせて、安房の方へと向ひました。

八、妙義山の五犬士

一、冤罪に苦しむ額藏

話は前へ戻つて、信乃と現八と小文吾の上へ移ります。三人は六月二十四日の朝、宮戸川から千住川をさかのぼつて、その日の夕方武藏國豊島郡神宮川へ着きました。信乃はこの前この川で寶刀を擦り代へられたことを二人に語りました。そして、三人は連れ立つて大塚の方へ行かうと思ひました。ところへ年の頃六十許りの漁師がやつて來て、マヂマヂと信乃の顔を打見守りましたが、やがて、叮嚀に口を切りました。



『もし、貴方は若しや大塚の庄屋の甥御さんではございせんか？』
言はれて信乃はやつと氣がつきました。

『お、お前は猎平ではないか！』

『では、やつぱり信乃様で、まあ氣の毒なことに、大塚では大變なことになりました』

『なに、大變なことだつて！』

『ちや、何も御存じないので……。まあ、こゝでは話しも出来ませんから、俺のところへお出で下さいまし』

そこで三人は猎平に伴はれて彼の家へ参りました。猎平はさつそく、簸上宮六と濱路の婚禮の話から、龜篠、墓六の殺されたこと、その場へ歸つて来た額藏が仇討をしたこと。それから又濱路が左母二郎に殺され、左母二郎も亦誰かに殺され、その場に土太郎、井太郎、加太郎のならず者が斬られてゐたことなどを語り



聞かせました。尙ほ又、額藏に斬りつけられた軍木五倍二は、自分の悪いことを匿して置いて、御陣代の丁田町之進に金をやつて味方とし『額藏が主人の墓六、龜篠を斬り殺して、その場に立寄つた宮六をも斬り殺し、また自分にもこの通りの傷を負はせたのです』と言ひ立てました。ですから此頃では、宮六の弟の社平といふ者と五倍二は、毎日のやうに額藏を白洲へ引き出しては、打つやら、蹴るやら散々非道い目に會はせ、額藏の證據人として呼び出された背介といふ男などは可愛さうに遂々拷問責めにされて殺されてしまつたとのことでした。——猎平は如何にも無念さうに涙を浮べてそれらのこと物語りました。聞いて三人は齒を喰ひ絞つて口惜がり、ごうかして額藏を助ける工夫はあるまいかといろく考へを凝らしました。それにしても此處にゐては人目につき易いといふので、やがて三人は瀧川の金剛寺に隠れて、ひそかに様子をさぐりました。

間もなく七月二日となりました。この日は小文吾の歸りが遅いからとて、大



坊が市川を發つて大塚へ向つた日でありました。この同じ日に、この大塚では大罪人の額藏を磔にするといふも觸れが出ました。

額藏はあれからといふもの無實の罪を被せられてそれは、非道い責め折監を受けました。重い石を膝の上に乗せられたり、腹一杯水を飲ませられたり……その度に額藏は氣が遠くなつて、身體中にはいつも生傷が絶えたことがありませんでした。けれども勿論額藏は覺えのないこと故決して白状をしませんでした。それと見て役人達はいよゝゝ嚴しい拷問に掛けました。ところが不思議なことに、これほど非道い目に會へば大概の者なら死んでしまふ筈なのですが、額藏は死ぬどころか、明るる日になると傷もすつかり癒つてピン／＼としてゐるのでした。而しこれには譯がありました。それは額藏がいつぞや犬山道節と斬り合つた時、肩の瘤から飛出した「忠」といふ字の玉を持つてゐて、密かに頭の髪の中にかくして置いたのでした。その玉で傷口や體を撫でると次ぎの日には生れ變つた

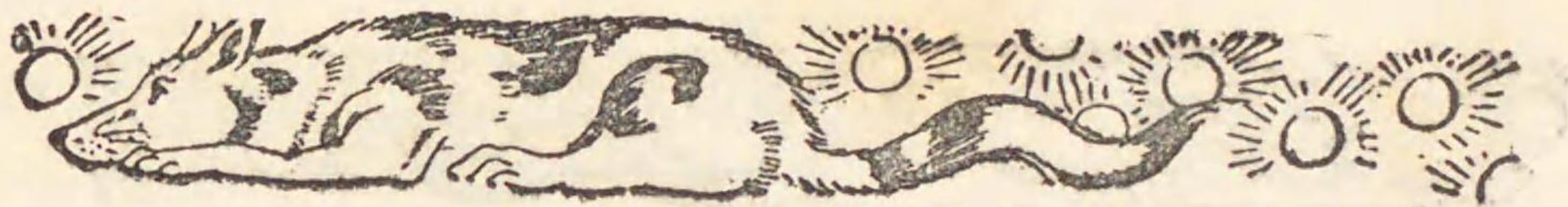


様に元氣快くなるのでした。——役人達は勿論、かうしたことなどは夢にも知りませんでしたので、額藏は妖しい術を使ふ怪しからん奴だから磔にして殺してしまへと言ふことに決まつたのでした。忠義者の額藏は果して悪人達に殺されてしまふでせうか？ 信乃、現八、小文吾達はその後どうしてゐることとせうか？

二、刑場破り

主人の墓六、龜篠夫婦を殺したといふ冤の罪を被せられて、可哀さうにも遂に額藏が死刑に處せられる日は來ました。

大塚庚申塚の刑場には四方に竹矢來をめぐらし、檢死役人の卒川庵八郎や數多の役人達が物々しく警戒して居ります。額藏はと見れば、高手小手に縛り上げられて多勢の番卒に護られ乍ら、真ん中の磔臺の下に引据えられてゐるのでし



た。今となつては最早逃れる術もありませんので、額藏は神妙に眼を閉じて観念をして居ります。

ドン、ドン、ドン、ドン……

やがて合圖の太鼓が打出されました。

すると卒川庵八はスクツと起ち上つて嚴かな口調で『これ額藏よつく聞け、その方は主人を殺し剩さへ陣代をも殺め乍ら未だ以つて白状致さず、なほその上不思議な妖術を以つて世を誑さんとは不屈至極、依つて見せしめの爲め磔申し付くるものなり』と、言ひ渡しました。

額藏はチラリと顔を上げると、無念さうに齒を喰ひしばりました。その時、番卒達はツカ／＼と進み寄ると、彼を縛つた綱の端を磔臺の上に引掛けて、容赦會釋もなく力任せにグイ／＼と引張りましたので、忽ち額藏の體は地上を離れて二尺、三尺、四尺——遂に六尺ほどの空にせり上がりました。



と、待ち構へてゐたと許り、右の方からは宮六の弟の社手が、左の方からは五倍二が、いづれも大きな竹槍を引提げて悠々と進み出ると

『額藏、観念いたせ』

『己れ、兄の仇だ、思ひ知れ』

と口々に言ふより早く、額藏の胸もと目がけて颯と左右から竹槍を振りかざしました。貼ひは違はずズプリと胸板を貫き、見る／＼鮮血が瀧津瀬の如くダダラ……と思つたら、これは意外、これは不思議！ 何處からかヒューツと風を裂くやうな音がしたかと思ふと、社平と五倍二の二人は竹槍振上げたまゝ、『呀つ』と叫んで打倒れてしまひました。おゝ、見れば二人の肩先には物の見事に鎗矢が一本づゝ射込まれてゐるのではないか！ 役人達が愕き騒いで起ち上つた途端、又もや次から次へと飛んで來た矢は、立所に七八人の者を射倒してしまひましたから、いよ／＼蜂の巢を突つついた様な大騒ぎとなりました。その時、彼方の稻



藁の蔭からヒラリと躍り出した武士二人、用意の竹槍搔ひ込むより早く

『われは犬塚信乃成孝なり』

『われこそは犬飼現八信道なり』と口々に名乗り乍ら、當るを幸ひ突き捲くりました。

『それ、曲者だ』と言ふので役人達は周章狼狽手に、太刀を抜放つて立向ひました。

ところが又もや一方より『吾れは犬田小文吾悌順なり』と名乗つて現れ出た者がありましたので、役人達は益々慌てました。その虚に乗じて三犬士は、力を協せて必死に斬り立てましたので、遂に五倍二は信乃に斬られ、社平は現八に、庵八は小文吾に殺されてしまひました。それと見て多勢の役人達は急に怯氣ついで何れも雲を霞に逃げ去りました。

三犬士はホツと一息、先づ額藏を礎臺から抱き下して介抱し、手短くこれまで



の物語りを聞かせました。そして、四人の者は涙を流して喜び合ひました。――が、一刻とて愚圖々々してゐる譯にはゆきません。追手のかゝらぬうちに早く逃れねばなりませんので、四犬士は手に手を取つてこの場を去りました。ところが、まだ半里とゆかないうちに、果して後らの方からワーツと関の聲がして、追手の勢が迫つてきました。彼らは早くも四犬士の姿を見付けると、鐵砲の筒先揃へて釣瓶撃ちに打つ放さうとしました。如何に武勇卓れた四犬士と雖も飛道具に逢つては敵ひません。進退谷まつた四犬士は、どうせ逃れぬ命ならば刀のつゞく限り斬り捲つてやらうと決心して身構へました。と丁度その時、今や追手の勢が火蓋を切つて放さうとした折、天の輿へか、俄かに一天掻き曇つて篠つく許りの大雨が沛然として到りました。追手の者は忽ち火繩を消されてしまつて、折角の鐵砲も役立たなくなつてしまひました。そして、狼狽え騒ぎ乍ら我勝ちに傍らの大樹の蔭へ逃げ込んで雨を避けましたが、その時俄然天も裂けん許りの大雷鳴が



したかと思ふと、眼眩むばかりの稲妻と共に落雷し、無惨や捕手の者は一人残らず氣絶してしまひました。

四犬士は危い所を助つて吻と一安堵、これもみな神様のお護りと心のうちで感謝し、雨に濡れそぼち乍ら、落ちゆく先を急ぎました。

三、目覺しい兄弟の働き

やうやく雨はあがりました。

やがて四犬士は戸田川べりまで辿り着き

「いや、こゝまでくればもう大丈夫だ」

「この川さへ越せば安心だ」と、言つて互ひに顔見合ひしました。ところが、河原まで来て見ると、河上河下を見渡しても合憎く渡しの舟が一艘も見えないのでした。これには一同途放にくれました。



「どうしたらいいだらう？」

「うん、困つたな……」

四人の者は満々として流れる河水を徒らに眺めてゐるばかりでした。

その時、突然背後の方に當つて凄まじい風のやうな物音がしました。思はず振り返つて見ると遙か彼方から一團の軍勢が蠢めくやうに押寄せてくるのでした。風の音と思つたのは馬の蹄の音なのでした。

「やつ、追手だ！」と一人が叫びました。

一難去つて又一難。いよゝゝ四人は絶對絶命です。たゞへ身は刃の錆とならうと、この上は後の世に耻ずかしからぬ華々しい最期を遂げようではないか、と言ひ合ひました。

やがて捕手の者は疾風の如く瞬く間に殺到してきました。それは陣代丁田町之進の率ゐる百六十人ほどの手勢でした。



四犬士はいざ来い來れと許り待構へてをりましたが、その時、河下の方から矢の如く漕ぎ寄せてくる一艘の舟があつて、舟の主は四犬士目がけて呼びかけました。

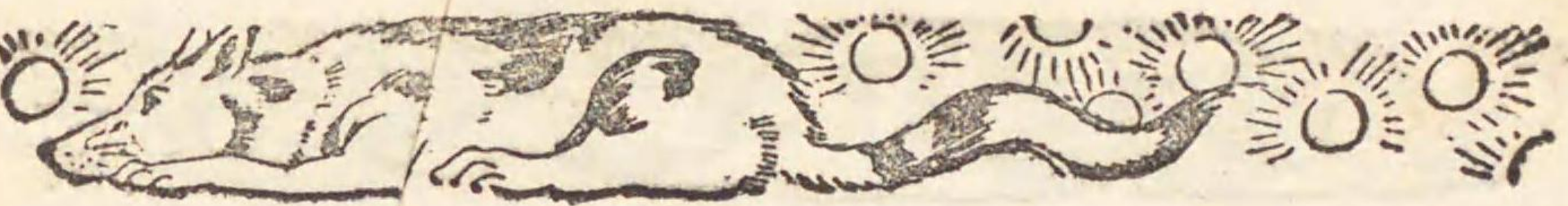
『皆さん、この舟で早くお逃げなさい、早く〜……』

これこそ思ひも寄らぬ助けの舟です。一同は大喜びで矢庭に舟へ躍り込みました。船頭がグイと棹を押すと、早くも舟は河の中程へ飛び出しました。ところがその船頭こそは誰あらう、いつぞや信乃、現八、小文吾が神宮川から舟を上つた時三人を己の家へ導いて額藏の身の上の一大事を知らせてくれた、あの漁師の猪平なのでした。四人は交るゝ猪平の厚い志に禮をのべました。その中に舟は小波を立て、向ふ岸へ着きました。と、その時丁度息せき切つて馳せつけた町之進は、この有様を見ると烈火の如くに憤り『者共進め！』と下知して、矢庭に馬をザンブと河へ躍り込ませました。續いて部下の者も吾遅れじとすゝみました。



ところが河の真ん中頃まで乗入れた時でした。ニユウと黒い頭が一つ水の中から浮び上つたかと思ふと、いきなり手にした熊手を差のべて、町之進の襟元に引っかけ、聲に河の中へ引ずり落してスバリと首を打落してしまひました。ついでその若者はヒラリと町之進の馬に打跨がると、熊手を振り振り、打騒ぐ部下共を片つ端しから絡めて水の中へ突き落しました。何者か知れませんが、實に眼にも留まらぬ早業です。ところが、その時又、捕手の後ろの岸の上に突如一人の若者が立現はれたかと思ふと、槍を振るつて水中の捕手目がけて當るを幸ひ田樂刺しにしました。たつた二人の若者に、水と陸からの挟み撃みにされて、さすが大勢の捕手達もしごろもごろとなつて騒ぎ立てました。

四犬士は岸邊に立つてこの兩人の目ざましい働き振りに見とれてゐましたが、やがて『一體誰だらう？』と猪平に尋ねました。すると、猪平は微笑み乍ら『なあに、あつしの伴の力二郎と尺八でございます。あつしも年を老りましたので、



二人の伴に手傳はせたのでがす』と何氣なく言ふのでした。

四犬士は聞いて愈々愕きました。

『ぢやかうしちやゐられん、あの二人を見殺しにしちや大變だ。さあ舟を出してくれ、二人を助けなければならぬ』

すると、猪平は慌て、四人を押止めました。

『まあ〜お待ち下さい。伴はあなた方をお助けしようとしてあの様に働いてゐるのです。それだのにあなた方があすこへ行つて命を捨てられては伴達の親切が無駄になつてしまひます。さあ一刻も早く、どうぞこゝをお逃げなさい。さうさう、上野の荒芽山には、私の妻の音音といふ女がゐます。一先づそこへお逃げ下さい。音音に聞けば何もかも分りませう。さあ〜早く……』

そして四人を追ひ立てん許りにしました。四犬士は猪平の有難い言葉に泣かばかりの思ひで、一先づ此處を立去ることゝしました。暫らくしてからつと振返

へると、二人の勇ましい若者も、もう討果されたものか、姿が見えませぬ。猪平は唯一人舟に乗つて中流へ出たかと思ふと、舟底の栓を抜いて、アレと言ふ間に舟と共に河底へ沈んでしまひました。四犬士は心ならずも親子三人の死を見送り乍ら、ともあれその音音とかいふ女に會へば、詳しいことが分るに違ひないと、上野の國の荒芽山をさして急ぎました。

四、討ち取つたのは偽首

信乃、現八、小文吾、莊助（額藏）の四人は夜となく晝となく歩きつゞけて、やがて上野の國へ入りましたが、途中妙義山の麓に差かゝると、誰言ふとなく、妙義神社に参拜しようではないかと言ふことになつて、一同は山へ登りました。参拜を終へてから中腹の茶屋に腰を下して四方の景色に見惚れました。眼下には天女の羅の様な雲が棚曳いて關東平野は天鷲絨を敷きつめたやうに緑色に美しく





光り、實に得も言はれぬ眺めなのでした。その茶屋には遠眼鏡が備へつけてあつて客に貸してをりました。莊助はその遠眼鏡を借りてくると、面白がつて麓の方を彼方此方と眺めました。

やがてのこと、莊助は遙か麓の方を、編笠で顔をかくした一人の武士の歩いてゐるのを見つけました。その武士は間もなく谷川に渡した丸木橋に差かゝりましたが、ふとこの時編笠に手をかけるとチラリと此方の方を仰ぎました。武士の顔を真面に見た時莊助は思はず『呀つ』と聲を立てました。驚いたのも無理がありません。その武士こそは、いつぞや圓塚山で火遁の術を使つて姿を消した犬山道節に違ひがないのでした。――が、道節の方では勿論氣付かう筈はありません。そのまゝ木立の中へ隠れて見えなくなつてしまひました。莊助は早速このことを信乃と現八と小文吾に話しました。と、三人もせひ未だ見ぬ兄弟に會ひたいと言ふので、四犬士はすぐさま山を走り下りました。



話は變つてその頃の管領、扇谷定正は、白井城に来てゐて、昨日の早朝から砥澤山に狩りを催しましたが、いよ／＼今日は御歸館になることとなりました。丁度午後の四時頃でした。松並木原を通りかゝらうとすると、行手に當つて一人の浪人風の武士が、松の根元に腰打下して、一振の刀を膝の上にのせ乍らきりに『千里をかける名馬はあつても、これを見る伯樂がない。干將鏢耶の名劍はあつてもこれを知る名將がない、あゝ惜しいことだ、残念なことだ』と嘆いてをります。お供の者がそれを見咎めて叱りつけましたが、一向耳に入る容子もなく相變らず同じことを呟いてゐるのでした。定正はふとそれを耳にすると、何か仔細があるに違ひないと思つて、聲をかけました。

『これ、その方は何者ぢや？』

すると、浪人はハツと夢からさめた様に顔を擡げると、恭々しく兩手をつきま



した。

「はつ、拙者は下總の住人、大出太郎と申します、父は早く世を去つて、家には病める母が誰一人ございます。實はこの寶刀を賣つて母の藥代にと思ひますが、誰も疑つて見てもくれません。いかにも残念でたまりません。

聞いて定正はヒラリと馬から飛び降りて更に尋ねました。

「然らば何か由緒ある寶刀とでも申すか？」

「ハツ、如何にも、この寶刀は源氏の家に代々傳はりましたところの村雨丸でございます。陸には犀象をも切り、水には蛟龍をも斷つと言はれましたこの名刀、どうぞ、御覽下さいませ」

言ひ乍らスラリと抜き放せば、夏なほ寒き氷の刃からは一沫の水氣が立騰るのでした。定正は如何にも感に堪えた容子で

「ふむ、天晴れ名刀ぢや、とくこれへ……」



と言つて手を差のべました。

浪人は膝まづき、恭々しく刀を捧げて近づきました。アワヤ手渡さうとした瞬間、いきなり突つ起ち上ると、定正の胸元突いて押倒し、大音聲で呼ばはりました。

「汝、管領定正よつく聞け、下總浪人大出太郎とは眞赤な嘘、去年の四月十三日に、汝のために討ち取られた練馬の郎黨、犬山監物道策の一子、犬山道節忠興とは我なり。今や君父のために仇を返す、思ひ知れ！」

言ひも終らず、定正の細首を難なく掻き切つてしまひました。

家來達は吃驚仰天！『スワ曲者！』と騒ぎ立て、八方から刃をめぐらして斬り立てました。得たりと許り道節も必死の勇を揮つて防ぎました。ところが道節が討取つた首は、日頃付視つてゐた定正の首とは思ひの他、似ても似つかぬ偽首だったのでした。道節は腹立しいやう口惜しいやうで、その偽首を叩きつける



と一方を切り破つて逃れました。

家來達はつづいて跡追ひかけました。

道節は路なき路を踏み分けて、次第々々に山奥深く分け入りました。いつか四邊は薄暗くなつて日も暮れかかりました。それでも追手の者は執ねく追つてきますので、道節は時々振返つては追手の者を斬り倒しては退けました。

暫らくゆくと、行手に當つて四人の武士が坂を下つてくるのに出會ひました。言ふまでもなくそれは道節を探しに來た四犬士なのでした。

道節は追ひくる捕手を斬り伏せ乍ら、四犬士の方目がけてひた走ると、ヒラリとその間へ飛び近み、後ろへ廻つたかと思ふと、早くもその姿は、掻き消すが如く見えなくなつてしまひました。

ところへドドツと押寄せてきた捕手の者は、四犬士がてつきり浪人者に助太刀したものだと思ひ込んだものか、一齊に稻妻のやうな刃を鋭く閃めかし乍ら取圍み



すると、苦者は吻と安堵の面持で

『私は武藏の國の者、大川莊助義任と申します。他に三人の連れがあつて、こちらを尋ねて参りましたが、途中不圖も喧嘩のそば杖を喰ひ、残念にも散々になつてしまひました。まだ唯も來てゐないでせうか？』

『はい、ごなたも見えませんが、武藏の方といへばお懐かしい。お聞きしたいこともございます。どうぞこちらへ……』

老婆はいそ／＼として奥へ導きました。莊助は暖かさうに火の燃えてゐる爐の傍へ座を占めると、老婆がさし出した茶を啜りながら、一體、他の三犬士達はどうしたのだらう、と案じました。

音音は音音で茶を汲み乍ら——今は戰國のこと故、うつかり油断は出來ない。もし、この男が敵の間者だつたら大變だ、一つ、こつそり様子を窺つて見よう、と思ひましたので



『實は嫁が今朝出たつきり未だに歸りませんから、一走り迎ひに行つてまゐります。どうぞ留守をお頼みます』と、何氣なく挨拶すると、外へ出てこつそり軒下に佇んで旅人の様子を窺ひました。——すると、恰度その時、一陣の風が颯と吹き込んで来たかと思ふと、部屋の中の燈火を吹き消してしまひました。

莊助は困つたと思ひました。漸く難儀を切りぬけて此處まで来て見れば留守にはされるし、燈火は消える。もしやツケ木でもあるまいか。と、手を伸して四邊を探ぐらうとすれば、茶碗を引繰返へしたり、紡車に躓づいたりする。ホト／＼困つた莊助は圍爐裡の縁へ寄ると火箸を取つて螢のやうな埋れ火を掻き起し、刈草をのせてフ／＼と吹きました。生枯れの草のせいにか、いくら吹いても燃え點きません。仕様事なしに莊助は暗闇の中で腕を拱いて、呆然としてをしました。

と、折柄、表の方より暗闇の中へツカ／＼と這入つて来た一人の男があらまし

た。その男は家の様子をよく知つてゐる者と思へ

『どうしたんだ、眞つ暗ぢやないか、音音々々、曳手、單節はゐないのか！』と言ひ乍ら、肩にした包みを取つて戸棚の中へ投げ入れると、これ又圍爐裡の向側へ、どつかと腰を下し、火箸をとつて、頻りに灰の中を掻き廻すのでした。

一體、その怪しい人影は何人なのでせうか？ 莊助は息をひそめてヂツと見据えておりました。

三、久し振りの莊助と道節

莊助はその時、ふと恐ろしい山賊のことを思ひ浮べましたが——さう言へばこの家も最前から怪しいぞ。殊に依ると、こゝは山賊の隠れ家かも知れない。自分の前にゐる男はたゞ者ぢやあるまい。と思つて、われ知らず傍への太刀を引寄せ、イザと言はゞ、斬りつけん許りに身構へました。





折しも、圍爐裡にくべた枯草が夜風に煽られてパツと燃え上りました。問髪を容れず互ひに屹と見交はす眼と眼、相手の男は早くも太刀搔ひ取つて、抜放たんとしました。がそれより早く莊助は片手を上げて、慌てゝさへぎりしました。

「は、早まり給ふな、犬山氏！」

言はれて相手の男は愕き顔で

「わが名を知つてをるそなたは何者ぢや？」

「われこそはそなたと天の許した兄弟なる犬川莊助義任ぢや、まづその太刀を納め給え」

「あゝ、これは犬川殿であつたか！」道節は益々意外顔でした。

そこで莊助は、伏姫のこと、役行者のこと、靈玉のこと、八房のこと、犬塚犬飼、犬田、犬江のことを物語り、更に彼等のために、神宮川で稽平が命を捨てまたその子の力二郎、尺八の二人が討死をして一同を逃したことなど語り聞かせ

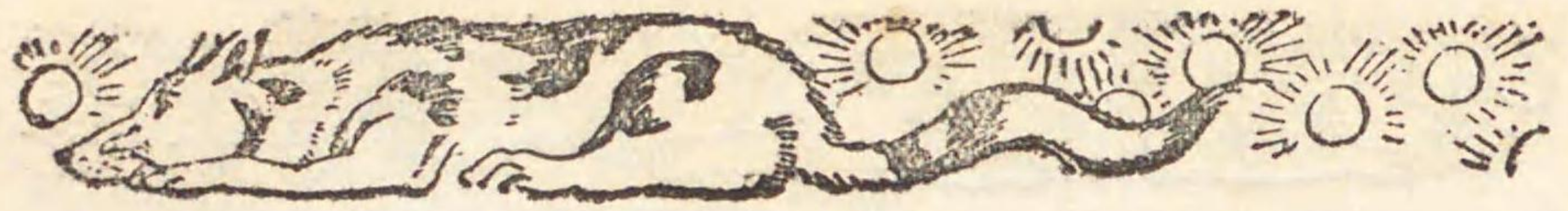
ました。

四犬士はあまりの事の意外に打愕きました。が、ともあれ刀を抜いて防ぎました。――が、四邊はいよゝ暗くなり、而かも敵は多勢と來てゐるのでしたから、さすがの腕並みすぐれた四犬士と雖も仲々の悪戦苦闘でありました。そして、各々相手を求めて斬り結んでゐるうちに、いつか離れ々になつてしまひました。

九、上州荒茅山の麓

一、戻つて來た稽平

お話變つて、上野國甘樂郡、荒茅山の麓に音音と言ふ年老つた女が住んでをりました。この音音こそ漁師の稽平の妻だつたのでしたが、故あつて二人は別れて





をりました。又その間には力二郎、尺八の二人の子供がりましたが、かの犬山道節に従つて戰場へ出たきり、未だに歸つて来ないのでした。で、音音は二人の倅の嫁とさびしい月日を送つてをりました。兄の嫁を曳手と言ひ、弟の嫁を單節と申しました。

すると七月六日のことでした。管領扇谷定正がお狩りを催すについて、人足をかり出されましたが、音音の家では男手がないので、姉の曳手が馬を索いてお供申上げました。——ところがどうしたものか、日が暮れても曳手は戻つて来ませんので、音音と單節は一方ならず心配してゐるのでした。

その時、表の方に當つて慌しく雨戸を叩く音がしましたので、さては曳手が戻つて来たのかと、音音が急いで出て見ると、そこには一人の旅の男が佇んでゐて『わしはこの山の麓に尋ねる者があつて来たのぢやが、今賊に會つてやつと此處まで逃げて来たところぢや、あゝ息が窒りさうだ水を一杯下さい』と言ふので

した。音音はうるたえ乍ら、ともあれ水を汲んで差出しました。とその途端、旅の男はチラと音音と顔を見ると、如何にも愕いたやうに聲を立てました。

『おゝ、そなたは音音ではないか、俺は猎平だ。よも見忘れはしまい』

——聞くより早く音音はパツと飛退つて、ビタリと雨戸を立てきり、聲を顫らし乍ら

『不忠者の猎平どには用がありません。練馬のお家はつぶされて、犬山(道策)の殿様も亡くなられたのに、オメ〜と命を生き存へ、よくも天道様が拜めます。それでも男と言へますか。そんな不甲斐のない人は、この家の中へは愚が、表に立つても遠慮して貰ひませう』

と言ひ棄てると、そのまゝ奥へ走り込んでしまひました。表の方では猎平が途方に暮れて茫然としてをります。と、それを見てゐた單節は、お母さんの心の中は知らないけれど、自分のためには大切なお父さん、それに武藏から來られたと





言へば、生きてゐる筈の夫の便りも聞かれることだらう、と思つて、密かに表へ出ると、猪平の持つてゐた荷物を受取つて、勞り乍ら一先づ柴置小屋へ導き入れました。

——が、一方姉の曳手は待てご暮せご歸つてまゐりませんので、單節は心配でならず、やがて、松火を點して甲斐々々しく、姉を探しに出て行きました。

二、訪れた莊助

音音が只一人、嫁達の歸つてくるのを待つてゐると、又もや一人の旅人が門口へ訪れました。

『もし、このあたりに音音と申す人はゐないでせうか？』

音音が出て見ると、年頃二十歳位の凜々しげな若者が立つてゐるのでした。

『はい、音音は私ですが、ごなたでございませう？』

した。

『お、そなたは力二郎に尺八ではないか！』

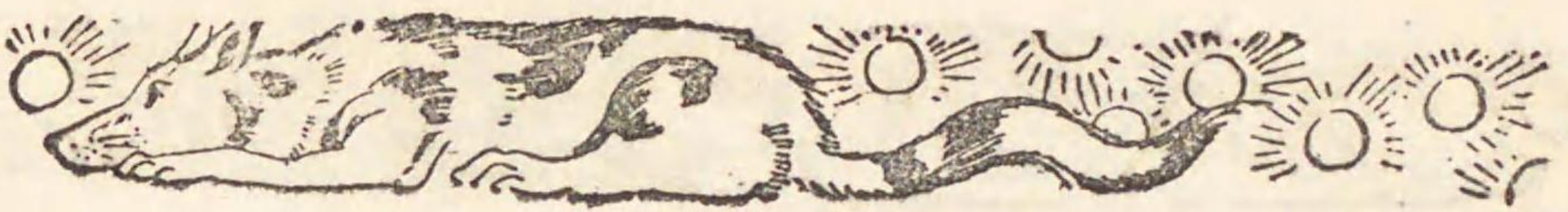
『えつ』と愕いたのは曳手と單節でした。見れば成程、紛ふ方なき自分達の夫なのでした。自分達が勞はり連れて來たのが夫の力二郎、尺八であつたとは、正しく神様のお引合はせと言ふべきでせう。それにしても、互ひに夫とも妻とも知らなかつたとはあまりに不思議なことでした。

夫婦に母子、五人の者は久し振りのめぐり會ひに、泣きつ喜びつ盡させぬ物語りに耽けるのでした。

曳手が圍爐裡へ柴をくべると、家の中は急に明るくなりましたが、二人の夫の顔は一向に元氣なく、色蒼ざめて、苦しげに息づいてゐるのでした。

やがて、力二郎、尺八の二人は交るゝ父親猪平の最期について語り出しました。戸田の河原で父は犬塚達四犬士を助け、遂に河の中へ舟を沈めて死んでしまつ





たこと。自分達もそれを助けて敵を八方に斬りなびけて戦つてゐたが、ふと母上のことを思ふと氣になり、河の底を潜つてこゝまで逃れて來たといふことを物語りました。

聞いて音音は思はず涙を催しましたが、さり氣なく装つて申しました。

『でも、猪平ごのは先刻こゝへ來られましたぞよ』

『え、ッ、先刻？』

兄弟は顔見合つて打愕きました。その時傍から單節が口を出しました。

『お母さん、あの時あまりお母さんがきついことを仰言るので、見るに見かねてお父さまを柴置小屋へ御案内しておきました。もし幽霊だつたら、もうとつくに消えてしまつたこととせう。でも、あの時確かに二つの荷物をお預りして、この戸棚の中へしまつて置いたのですか……』

言ひも終らず單節は起ち上つて戸棚の中を探しました。と果して中にはチャン



と預つたまゝの二つの小さい荷物がありません。

『お母さん、ありませんよ。これですよ』

『これ、お見せ』音音が手に取つて見ると、何やらどつしりと重い物なものでした。音音は審かしく思ひ乍ら『幽霊がこんなものを持つてくるとは不思議だね。とも角、開いて見よう』と言つて包みに手をかけました。

と、力二郎と尺八は何と思つてか頻りにそれを止めるのでした。曳手と單節は耳にも入らず、音音も手傳つてやがて包みを解けば、これはまあ、どうしたこととせう！ 現はれ出たのは無慘にも血潮に染んだ男の斬り首が二つ！

『喝ッ』と聲をあげて三人はひとしく後ろへよろめきました。途端にバツと燃え立つた青い鬼火が二つ部屋の中を二三度廻つたかと思ふと、フラ〜と軒端を傳はつて外の闇へ消えてしまひました。ホツとして見廻はすと、今の今までそこにゐた筈の力二郎、尺八の兩人の姿がいつの間にも消え失せてゐるのです。生



首はと見れば、三人の者にはまるで見覚えのない人の首なのでした。

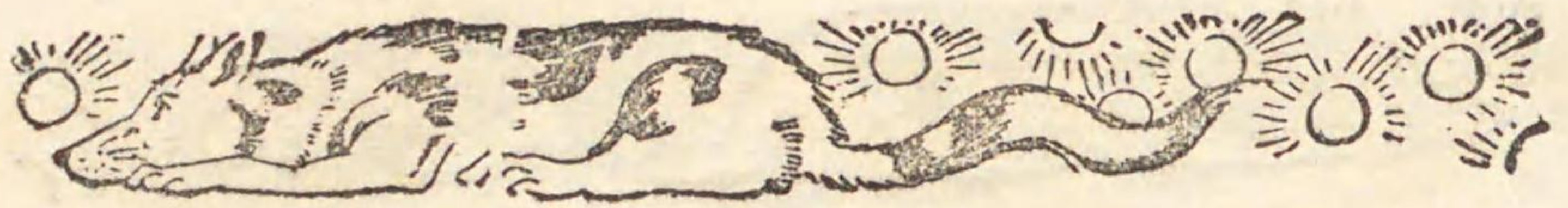
ハテ、これは一體、何の謎なのでせうか？

その時、表の方から「いや、その謎はわしが解いて進せよう」と時ならぬ聲がしましたので、思はず振向くと、幽霊ならぬ猎平がツカ〜と這入つて来るのでした。

打驚いてゐる三人を見やり乍ら、先づ猎平はしづかに上座に坐る、と二つの生首をチーツと打見守り乍ら

「わしが武藏の國から、持つて来たのはこれとは違ふ。他にまだ包みがある筈ぢや」と申しました。

單節は又もや起ち上つて戸棚の中を探しました。果して中には同じやうな包みがやはり二つありました。



ました。

道節は圓塚山で莊助に斬られた肩の瘤が少しも痛まず、傷の跡が牡丹の形の痣になつたことを語つて、肌脱ぎになつて肩を見せました。又、村雨丸を自分が持つてゐたために信乃が苦しんだことを氣の毒がり、猎平の死を残念がりました。

なほ、カ二郎と尺八は道節の家來で、定正を討取る手助けとして武藏の國へやつて居いたのだが、四犬士を助けるために討死を遂げたとは不愼の到りと言つて涙ぐみました。更に道節は今日の夕方、白井の道で定正を討ち取り損なつたことを物語り、最後に、圓塚山で斬り合つた時取違へたなりになつてゐた莊助の「義」の玉を取出し、莊助の持つてゐた自分の「忠」の玉と取換へました。

二人の話はなかく、盡きようとしませんでした。やがて、道節はふと氣がついたやうに「さり乍ら、他の三犬士はどこへ行かれたことだらう。このあたりは定正の領地のこと故、又捕へられてどんな憂き目を見るやう知れぬ。ともあれ



探して参らう』と言つて起ち上ると、莊助も續いて従ひましたので、二人は連れだつて外へ出てゆきました。

入れ替つて裏口の方からは音音が眼を泣き腫らして這入つて來ました。今の二人の話によると夫の猪平と二人の伴は最早この世の人ではないとのこと……。では先刻來たのは猪平の幽霊であつたのか、と歎き悲しみ乍ら音音は佛壇に御燈明を上げて膝まづきました。

『南無阿彌陀佛々々々々々々々々』

涙乍らの念佛の聲がいつも哀れに聞えました。

暫くすると、表の方に當つて何やら騒がしい物音がしました。ハツと吾に返つた音音が走り出て見ると、莊役の根五平と、樵夫の丁六、顯介の三人が提灯片手に立つてゐるのでした。

『白井のお城から、急ぎのお報せだ。このあたりに練馬の殘黨の、犬山道節とい



ふ年頃二十二三、身の丈高く色白く、月代のびた曲者が潜み込んでゐるから、もし見出した者は速かに申し出でよ。搦め取つた者には重い褒美を取らせる。なほその同類と思ふ者が四五人ある。その名はまだ分らないが、知る者あらば申し出でよ。隠まひなご致す者は重い罪であるぞ。——婆さん、分つたか』

『はあ、御苦勞さんでした。お茶でも飲んでゆかつしやれ』

音音の聲を耳にも入れず、三人の者はそのまま立去つてしまひました。

四、我子の生首

音音は後見送つて吻と一息。かねて覺悟はしてゐたものゝ、氣がよりなのは道節その他の犬士の身の上なのでした。何處へゆかれたことか知らぬが、どうぞ途中で大事がなければよいが……と心配をしてをります。

ところへ、チャリン／＼といふ鈴の音と、馬の蹄の音が表の方へ近付いてきま



した。さては曳手が戻つて来たのかと、出て見れば、果して、曳手は、その馬の脊に、病み疲れた二人の旅人に乗せ、單節はその旅人の荷物をこゝまで脊負ひ乍ら、右手に松火をさし上げて戻つて来たのでした。

「おや、その旅人はどこのお人だへ？ 今し方、白井のお城からお使ひが来て、旅の者といへばお泊めするなと言はれたのだが……」

音音はもしや敵方の間者ではないかといふ心配が先立つて言ひました。

「お母さん、實は今日の暮れ方、殿様のお歸りがけに狼藉者が現はれて大へんな騒ぎとなり、私が困つてゐましたところ、計らずもこのお二人の方が來られて、助けて下さいました。それなのに、このお方達は廣野の邊まで來ると俄かの病氣でお苦しみ、施すすべもなくこの通り馬に乗せてお連れ申しました」

聞いて音音も無理ないことと思ひ、ともに手傳つて旅人を勞はり乍ら座敷へ上げようとしたが、行燈の灯影でチラと二人の顔を見ると思はず聲を立てま

單節が取る手も遅しと披いて見れば、おゝそれこそ、今の今まで、そこにゐた力二郎と尺八に寸分違はぬ生首なのでした。

さて、猪平はわが子の生首を前にして、そもく何事を語り出すのでせうか？

十、小文吾の猪退治

一、落ち合つた五犬士

……さて猪平は二人の悴の生首を前にして、音音、曳手、單節の三人の顔を見やり乍ら、徐ろに語り出すのでした。それは、あの戸田川で四犬士を救つた時の勇ましい物語りでした。

「……おゝ、その時、悴の方二郎と尺八は、大勢の敵を相手に見るも目覺ましい働き振りぢやつたが、何せい味方は小勢で相手は大勢、しかも釣瓶打ちに鐵砲を





射かけるんだから堪つたもんではないわ、不惑にも悴二人は、遂々急所を射抜かれて敢へない最期ぢや。そこで、わしも一旦流れに身を沈めたが、日頃習つた水練が邪魔になつて、ごうしても死にきれぬのぢや。まゝよ敵の中へ斬り込んで華しく討死にしようと思つて、陸へ上つて見れば、早その時は敵の影も形も見へないのぢや。この上は、せめて二人の子供の討死の報せなりと、身よりの者に告げようと思つて、大塚の城下へ忍び込んで見れば、可愛い悴の首が二つ晒し物になつてゐたのぢや。おゝ幸ひこれを信乃と額藏の首の偽首にせうと思つて、それからひた走りに漸くこゝまでやつてきたのぢや……』

猪平老人が涙乍らの物語りでした。これで猪平が幽霊でないといふことが漸く分りました折柄、裏山では、ホロ／＼と小鳥の啼く聲がします。四人の者は涙を呑んで暫し言葉もないのでした。

——と、その時、突如縁側の障子を蹴倒してドカ／＼と跳り込んで来た者があ



りました。見れば、おゝそれは、先程歸ると見せかけた根五平、丁六、頼介の三人ではありませんか。

『ヤア聞いたぞ／＼、一つ残らずみな聞いたぞ、さあ尋常に繩にかゝれ』

眞つ先に立つた頼介がさう呼ばはりました。音音は思はず曳手と單節を後ろに庇つて、寄らば斬らんと身構へました。猪平は少しも狼狽へず『無役な殺生は厭へども、望みとあらば、その息の根を止めてくれようか！』と言ふより早く、仕込杖を搔込みました。老人と侮つてか根五平は『それやつつけてしまへ』と下知し丁六頼介と共に左右から斬つてかゝりました。猪平はヒラリと遣り過しておいてから、颯と閃く稻妻と共に、見事丁六の肋を斜めに斬りつけました。之を見て慌て、逃げ出さうとした頼介の肩先、後ろから不意に音音が刃を打ち込んだから堪りません。ドタリと倒れてしまふ。この有様を膽をつぶした根五平、轉ぶやうに逃げ出す途端、奥の座敷から『エイッ』といふ氣合と共にヒューッと飛んで来た



手裡劍が規ひ違はず脊中から胸にブツスリ突き刺つたので、これ又空を掴んで打倒れてしまひました。その手裡劍の主こそ誰あらう、犬山道節がこの時既に他の四犬士と共に歸つてきてゐて、一寸手助けをしたのにすぎませんでした。かくて、信乃、現八、小文吾、莊助、道節の五犬士及び猪平、音音、曳手、單節などの心床しき人達の集ひで、この淋しい山奥の山莊も時ならぬ賑はひを呈しました。四犬士は更めて猪平に戸田川の禮を述べ、道節は信乃に寶刀を返し、音音は莊助を疑つてゐたこと等を話し合ひ、その夜は東明近くまで一同語り合ひました。

二、犬士の大奮戦

……ところが白井の城中では何處からどう聞き知つたものか、遂に音音の隠れ家を嗅ぎつけて大勢の兵を向けることになりました。それを知つた猪平と音音は己の身より先づ五犬士の身の上を氣遣つて、一時も早くこの土地を立退くやうに





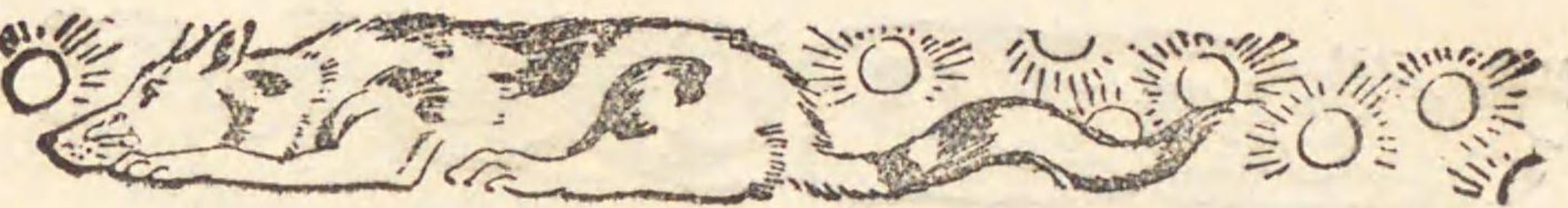
と進めました。が、何でオメ／＼と敵に背後を見せられませう。五犬士は色々相談の上——『とに角一合戦してから引揚げることにしよう』と言ふことになり、一先づ夫婦の者にこの家を守らせ、五犬士達は脊戸に隠れてゐて、不意に跳り出て敵を崩さうといふことに計畫を決めました。なほ、曳手單節の女達は、小文吾に頼んで、下總の國へ連れて行つて貰ふこととし、二人を馬に乗せて程近くの木蔭につないでおきました。かくて愈々用意は整ひ、城兵共の押寄せるのを今や遅しと待構へてゐるのでした。

一方、敵の大將、巨田薪六助友は、手勢三百餘を引つれて、この荒ら屋を一揉みにしてくれんずと許り疾風の如き勢ひで殺到してまゐりました。此方は猪平の老夫婦、家の中に籠つて俄か作りの弓矢を番へて、障子襖の間からヒュー／＼と射出のでした。元より覘ひも定めず盲滅法に射るのでしたが、何しろ敵は隙間もなく押寄せてくるのですから、忽ち先に立つてゐた五六人の者はバタバタと將



暴倒しに打倒れてしまひました。けれども敵は新手々々こ入れ替つてヒタ押しに雪崩かゝつてくるので、アワヤ老夫婦の支へる荒ら家も危うげに見えかゝりました。あまつさへ矢玉が盡き果てたので、夫婦の者は薙刀を執ると、ヒラリと跳り出てこゝを先途と許り打闘ひました。——こちらは物蔭に潜んで様子を観つてゐた五犬士達。頃はよしと言ふので、勇み勇んで一時にドツと許り跳りました。ところが、未だ百歩も行かぬ中に、思ひがけなく突如岩蔭から現はれ出た一隊の城兵。その真ん先に進んだ一人の武士は、崩草絨の身甲に、白毛織の陣羽織を着なし、紫金作りの太刀を横たへ、弓杖突き立て、聲高らかに『愚かなる、犬山道節、巨田薪六助友こゝにあり』と呼ばはりました。

道節はじめ五犬士は『それ、奴を打取れ!』と許り、何れも切尖揃へて突つ掛りました。ところが意外、その時又もや『愚かなる犬山道節、巨田薪六助友こゝにあり』との聲が後ろの方に當つて聞へました。思はず振向けば、こわ如何そこ



には又一人、前の巨田薪六と同じ扮装の武士が馬に打たれたがつて攻めかけてくるのでした。犬士達は火に焦つて前後左右に斬り捲くりましたが、妖怪のやうな巨田薪六のためには散々に打惱まされた。

折りも折、敵兵が火を放つたものか、音音の荒ら屋は炎々と燃え上り、火焰は山風に煽られて、凄いはざ裏山の青葉に映へ、生木のはせる音がバチ／＼と聞へるのでした。而かも合憎五犬士は風下に當つてゐたので、熱い烟に煽られて眼も眩むばかりです。その機に乗じて敵兵は遮二無三に斬り込んでくるので、いよいよ苦戦に陥りました。五犬士は勵ましく／＼戦う中に相去ること次第に百歩二百歩或ひは岩の蔭に避け、または山を攀じしてゐる中に五人が五人、遂に分れ／＼となつてしまひました。

三、姉妹を乗せた馬

一方、犬田小文吾は血刀に絶つて喘ぎ喘いでやうやく圍みを破つて逃れましたが、さて氣にかゝるのは、自分が預かつた曳手、單節のことでありました。そこで再び足を返して馬をつないであるところへ戻りました。ところが既にその時には敵の雑兵が二三人、二人の女を見付け出して、争つて馬の絆を取らうとしてゐるところではありませんか！

小文吾は『己れ』と、大喝一聲太刀振りかざして矢庭に躍り出しました。同時に雑兵目がけて『エイツ』と斬り下した刃は、覗ひ外れて馬の絆を眞二ツ！その途端ヒ、ンと馬は愕き嘶いて、二人の女を乗せたまゝ、蹄の音も高く東の方へ走り出しました。これはと驚いた小文吾、返す刃で雑兵を斬り倒すと、そのまゝ馬の跡をまじつぐらに追ひかけました。

——話變つて荒芽山の麓には、六七人の野武士達が、逃れてくる落武者を剥ぎ取らうと手ぐすね引いて待ち構へてゐます。ところへ彼方からポカ／＼／＼と時





ならぬ馬の蹄の音、ハテナと思つて見やると、間もなく、二人の女を乗せた馬が轉ぶやうに走つてくるのでした。べたとばかり野武士は大喜び、早速手を廣げて道中に立はだかつてとどめようと思いました。が、猛り立つた馬の眼に何で野武士の姿など入らばこそ、近づく者は噛み倒し、蹴散らさんばかりの勢ひで、忽ち駆け抜けて行き過ぎようと思いました。それと見て一人の男、突嗟の機轉で素早く傍への鐵砲取上げると、ズドンと一發打つ放しました。覗ひは違はず馬の尻に命中しましたので、さすがの名馬も女二人をのせたまゝ四足折つてドババと打倒れました。

——と、遙か彼方にあつてこの態を見やつた小文吾は氣は氣ではなく、一目散に駆けつけようと思いましたが、さて仲々追ひ付けません。

一方、野武士は吻とした様子で『いや、どうも恐ろしい馬だつたな』と吐き乍ら近寄らうとしました。——と、その途端、怪しい二つの鬼火が、何處やらとも



なくフワリ〜と漂つてきたかと思ふと、馬の頭の邊にポトリと落ちました。すると、不思議、馬は俄かに正氣づいてガバと起き上つたかと思ふと、身ぶるひ一つして走るわ〜、先刻より幾十層倍の早さで、忽ちアレ〜と言ふまに行方も知れずなつてしまひました。稍たつて小文吾は息せき切り乍ら馬の跡を追つて走つてゆくのでした。

四、馬加の邸へ

小文吾はどうかして馬を捕へたいと言ふ一念で一生懸命に追駆けましたが、不思議にも馬の足は眼にも止まらぬ程速く、残念乍ら遂々見失つてしまひました。そこで小文吾は、仕方なく東に西にと漂つて日を送つてゐる中に、やがて、武藏の國は淺草寺に程近い、阿佐谷といふ里へたどりつきました。

頃は初秋の夕ぐれ。小文吾が疲れた足を引すつてトボ〜と歩いてゐると、彼



方から砂烟を立て、眞つ幕に小文吾の方目蒐けて走つてくるものがあるの
 た。ハテナと思つて小文吾は思はず立止まりました。やがて近付くに従つて、
 見るから猛々しい一匹の猪だと言ふことが分りました。しかも、手負ひの猪らし
 く鋭い牙を剥いてウーと物凄く唸り乍ら走つてくるのでした。尋常一様の者だつ
 たら齒の根も合はず立ちすくんでしまうところなのですが、小文吾はそんな臆病
 者ではありませんでした。イザ来いと言はんばかり刀を抜いて身構へると、やが
 て、牙逆立て、ドドドツと飛び込んできた猪の背中へヒラリ、眼にも留まらぬ早
 業で飛乗つてしまひました。つゞいて確かと首筋捕へて右手の刃をキラリと閃め
 かしました。かうなつたらもうしめたもんです。二突三突！ 豪力無双の小文吾
 が満身の力を籠めて突き立てれば、何條以つて堪る可き、追がの野猪も地響き打
 つて打倒れてしまひました。實に仁田四郎にも並ぶ可き、天晴れ武勇と謂はねば
 なりません。



かくて小文吾は吻と一息、血刀拭つて歩き出しましたが、物の一二町も来たか
 と思ふと思はず『ヤ、』と呟いて佇みました。見ると、鐵砲片手に持った獵師が道
 傍に氣を失つて打倒れてゐるのでした。素より情深い小文吾のこと故直ぐ様駆け
 寄つて介抱に手を盡しました。その甲斐あつて獵師は間もなく正氣に返りました。
 その獵師は鷗尻の並四郎と言ふ者でしたが、今しがた猪を射留め損なつて傷を受
 けたのでした。並四郎は小文吾の親切に深く感じて、今宵はせひ私の家へ泊つて
 呉れる様に……と頼みました。言はれるまゝに小文吾はその夜、並四郎の家へ厄
 介になりました。

ところが人の心程分らないものはありません。正直者らしく見せかけたこの並
 四郎こそは不敵な悪人なのでした。そして、並四郎は妻の船虫と心を協はせて、
 小文吾を偽つて恐ろしい罪に陥し入れようと企んだのでした。が、天は決して悪
 人には與しませんでした。小文吾は不圖もこの土地の領主千葉殿に見出されて、